

# 熊野の自然

## (熊野町でみられる動植物の紹介)

熊野町

## 目次

【春】 ..... 1~29

### 植物

- ウグイスカグラ
- オオイヌノフグリ
- キキョウソウ
- キツタ
- クサイチゴ
- クサノオウ
- クロキ
- ケヤマハンノキ
- コツクバネウツギ
- サンヨウアオイ
- ジャケツイバラ
- ショウブ
- シロツメクサ
- スズメノヤリ
- タムシバ
- ダンコウバイ
- ナツハゼ
- ハイノキ
- ハネミイヌエンジュ
- ヒガンマムシグサ
- ヒメハギ
- ヒメヤマツツジ
- フキ
- フデリンドウ
- ヘラオオバコ
- ホオノキ
- ヤマザクラ

### 昆虫

- ルリタテハ

【夏】 ..... 31~56

### 植物

- アカイボカサタケ
- アカメガシワ
- ウマノスズクサ
- ウラジロマタタビ
- ウワミズザクラ
- エゴノキ
- オカトラノオ
- ガヤドリナガミツブタケ
- ガンピ
- クズ
- セリ
- ネムノキ
- ノアズキ
- ノビル
- ハキダメギク
- ヒナタイノコズチ
- ヤブジラミ

### 昆虫

- エゴノネコアシアブラムシ
- オオトモエ
- ゴマダラカミキリ
- ジュウジナガカメムシ
- ダイミョウセセリ
- チャドグガ
- ハイイロチョッキリ
- ベニシジミ

植物

- アキノキリンソウ
- アケボノソウ
- アメリカセンダングサ
- オニフスベ
- カマツカ
- キクバヤマボクチ
- キツネノマゴ
- コウヤボウキ
- コバノガマズミ
- ゴンズイ
- シロオニタケ
- センボンヤリ
- ツチアケビ
- ヒイラギ
- ヒメヤシャブシ
- ホソバママコナ
- マルバノホロシ
- マンネンタケ
- ムラサキシメジ
- ヤクシソウ
- ヤマジノホトトギス
- リンドウ

昆虫

- キイロスズメ
- クスサン
- セスジスズメ
- メンガタスズメ

植物

- アカマツ
- アラカシ
- イヌツゲ
- ウラジロ
- ウラジロノキ
- ウリハダカエデ
- カクレミノ
- カゴノキ
- カラタチバナ
- クロモジ
- コシアブラ
- コナラ
- ザイフリボク
- タカノツメ
- タマキクラゲ
- ツチグリ
- ツバキキンカクチャワンタケ
- ツルグミ
- ハタザオ
- ハハコグサ
- フユイチゴ
- マンリョウ
- ミヤコイバラ
- ヤブムラサキ
- ヤマウルシ
- ヤマハゼ

昆虫

- ウスタビガ
- フクラスズメ

鳥

- ウグイス



## 【春】

### 植物

○ウグイスカグラ	2
○オオイヌノフグリ	3
○キキョウソウ	4
○キツタ	5
○クサイチゴ	6
○クサノオウ	7
○クロキ	8
○ケヤマハンノキ	9
○コツクバネウツギ	10
○サンヨウアオイ	11
○ジャケツイバラ	12
○ショウブ	13
○シロツメクサ	14
○スズメノヤリ	15
○タムシバ	16
○ダンコウバイ	17
○ナツハゼ	18
○ハイノキ	19
○ハネミイヌエンジュ	20
○ヒガンマムシグサ	21
○ヒメハギ	22
○ヒメヤマツツジ	23
○フキ	24
○フデリンドウ	25
○ヘラオオバコ	26
○ホオノキ	27
○ヤマザクラ	28

### 昆虫

○ルリタテハ	29
--------	----

## ○ウグイスカグラ（鶯神楽）

『ウグイスカグラ』は、細長い柄の先に、淡紅色の花を提灯のように吊り下げます。花の長さは1cm余りで、5つに裂けて開きます。

実は、長さ1cmほどの楕円形で、6月に真っ赤に熟し食べられます。水分が多く少し甘みがあります。

葉は対生します。勢いよく伸びた長い枝では、葉柄の枝に付く部分が広がって反対側とつながり刀の鏢（つば）のようになります。鏢状の部分と細長い果実の柄は葉が落ちた後も残り、冬の良い観察ポイントになります。



▲ウグイスカグラの花

日本特産で、本州、四国、九州に分布する落葉低木です。庭に植えたりします。枝を分けて茂るため、ウグイスがよく隠れるそうです。

名については「ウグイスの踊りはねるような動きを神楽踊りに見立てた」という説がありますが、定説はありません。「隠れ」や、狩場を意味する「狩座（かりくら）」が「カグラ」に転訛したのではないかととも言われます。

別名『ウグイスノキ』とも呼ばれ、古い書物の「大和本草」には「ウグイスノ始テ啼時ニ此花モサク故ニ名ツケシニヤ」とあります。花期は3月終わりから5月初め頃で、ウグイスの初音の頃とは少しずれている気もします。

全体無毛の『ウグイスカグラ』、葉が有毛の『ヤマウグイスカグラ』、腺毛<sup>注1</sup>のある『ミヤマウグイスカグラ』と分類されます。

注1：腺毛は、先が丸く粘液を出す毛のことです。

## ○オオイヌノフグリ

『オオイヌノフグリ』の花は日が当たると開きます。虫が花粉を媒介しますが、虫が来なくても受粉する仕組みも備えています。2本の雄しべが内側に曲がって雌しべに触れ、自家受粉するのです。こうして確実に種を作り、分布を広げます。

茎は根元で枝を分け、地面を這うように広がっています。

葉は茎の下部では対生、上部では互生します。

花は上部の葉腋から1本ずつ出た細長い柄の先に1個ずつ咲きます。直径8～10mmの皿型で深く4裂し、1片はやや小さく淡色です。1つの花は1日だけで、午後には、花に手を伸ばすとぼろっと落ちてしまいます。毎日新しい花ばかりで綺麗です。

実は、やや平たいハート型をしています。



▲オオイヌノフグリの花

西アジア原産の2年草で、国内では、明治20年頃に東京で発見されました。現在では日本各地でごく普通に見られます。

日だまりで真っ先に春を知らせてくれる里の花で、町内では2～4月頃にみられます。

名にある「フグリ」とは、陰囊の古語です。『イヌノフグリ』の名は、花は小さく淡紅紫色が目立たず、実が犬の陰囊に似た丸みのあることから、この名が付けました。『オオイヌノフグリ』は花などが大きいので「大犬の陰囊」となりました。

また、俳人・高浜虚子の俳句に「いぬふぐり 星のまたたく 如くなり」という句があります。この「いぬふぐり」は、『オオイヌノフグリ』のことを指しています。ぱっちり開いた美しい青い瞳にも見えることから、千葉県では「星の瞳」の名があります。

## ○キキョウソウ

5～6月に、上部の葉腋に直径1.5cmほどの紫色の花が咲きます。下の方には、閉じたまま開かないで種を作る閉鎖花がつきます。

実は円筒形で、上にごく片が残っています。熟すと個性的な裂け方をします。側面に3個の穴が開くのですが、庇（ひさし）のついた窓のように見えます。英名『Common Venus' looking-glass（ヴィーナスの姿見という意味）』は、この部分から付いています。

道ばたや土手などに見られ、茎は高さ10～80cm、葉は互生し、円っぽい葉が茎を抱くように付いています。



▲キキョウソウの花

北米原産の一年草で、帰化植物<sup>注2</sup>です。国内では、明治中期に東京の植物園で栽培の記録があります。現在は本州以南、特に関西以西に広く分布しています。私が最初に見たのは1970年頃、広島市の薬草園でした。

町内には、花のよく似た『ヒナギキョウ』もあります。すうっと伸びた細長い花茎の先に1個ずつ花をつけるので、姿は全く違います。

桔梗によく似た花が咲くので『キキョウソウ』という名がつけられました。段々になって咲き上がるので別名『ダンダンギキョウ』とも呼ばれます。

注2：帰化植物とは、人間が媒介となって原産地から移入され、野生化して繁殖している植物のことです。栽培のため意識的に移入する場合と種などが何かに混じって無意識的に移入される場合があります。

## ○キツタ（木蔦）

冬、落葉樹が幹に分厚い緑の衣をまとった姿が目を引きまます。緑の衣が『キツタ』です。

つるから根をびっしりと出して、幹に付着します。この根は「気根」といいます。気根は、空気中の水分や栄養を取り込むために生えるもので、幹から水分を奪うことはありません。つるは、太くなると直径6 cm 以上にもなります。



葉は互生し、やや厚く光沢があります。長さは3～7 cm で長い柄が付いています。若い枝の葉は3裂か5裂しますが、花をつける枝の葉は卵円形で裂けません。

10～11月頃、枝先に多数の小さな花が丸く集まって咲きます。花びらは黄緑色で5枚あり、雄しべは5個、直径は7 mm ほどです。花には、ハエやハチの仲間が訪れて受粉を助けます。

実は3～5月に黒紫色に熟し、ほぼ球形で直径は6～7 mm くらいです。

北海道南部より南の標高の低い所に分布し、町内でも普通にみられます。

葉が大きく公園などの地面を覆っているのはキツタ属（ヘデラ）の園芸種です。欧州の神話にはヘデラを絡めた杖を持つ酒神が出てきます。葉を噛むと二日酔いを防ぐとされ、ヘデラの輪を居酒屋の目印としたり、結婚式にも用いたりしたそうです。

晩秋に見事に紅葉する『ツタ（蔦）』に比べ、木の性質が強いので『キツタ』の名が付いています。常緑で冬も葉があるので、『フユツタ（冬蔦）』の別名もあります。（『ツタ』は別名『ナツツタ（夏蔦）』で、ブドウ科<sup>注3</sup>の植物です。）

注3：『キツタ』はウコギ科の植物です。

## ○クサイチゴ（草莓）

4～5月、前年の茎から出た短い枝の先に、普通1個の花をつけます。直径3～4cmの真っ白い花が目を引きます。花びらは5枚、雄しべは多数あり、中心部にある球形にふくらんだ花床の上に雌しべが多数並んでいます。

果実は液果状で、甘く食べられます。1粒が1個の果実で、小さな果実が多数集まっている集合果です。赤く熟し、直径は1cmほど。『フユイチゴ』や『ナワシロイチゴ』に比べると、1個の果実が小さくて数は多く何倍もあります。

葉は互生し、小葉3枚または5枚の複葉です。縁には鋸歯があります。表面は葉脈に沿ってへこんでいます。両面に軟毛が多く、茎や葉には刺があります。

畑や藪の縁などに普通に見られる落葉小低木ですが、冬に葉が残っていることもよくあります。地下茎を長く伸ばし、新しい苗を作って繁殖するので群生します。

『キイチゴ（木莓）』の仲間は、世界に数百種あり北半球に多く分布します。国内には約40種、町内には8種自生します。

『キイチゴ』の仲間ですが、丈が20～60cmと低く、草状なので『クサイチゴ』の名があります。集合果は、摘むと花床からすぐにはずれます。中空で鍋のような形なので、『ナベイチゴ（鍋莓）』の別名があります。果期が5～6月とやや早いため、『ワセイチゴ（早稲莓）』の名もあります。



▲クサイチゴの花

## ○クサノオウ

『クサノオウ』は毒性の強い有毒植物です。茎や葉を切ると出てくる橙黄色の液は強い毒性のアルカロイドを含み、痙攣や呼吸麻痺などを起こします。

毒草は、しばしば薬草として使われます。

漢方では、漢名の「白屈菜（はくくつさい）」の名で呼ばれる薬草です。花の頃、全草を採取し乾燥させて用います。鎮痛、消炎、解毒などに効果があるそうです。しかし、量が過ぎると昏睡が始まり麻痺や腹痛などが起きるので、安易に使うのは危険です。



▲クサノオウの花

直径2 cmほどの黄色い花が、4～7月頃に咲きます。花びらは4枚で、雄しべは多数、雌しべは1本あり、伸びて長さ3～4 cmの実になります。少ししわしわで、象の鼻を連想させます。

種は黒く、端に白い脂肪体があり、これを好むアリが種を運びます。

茎は中空で、高さ30～80 cmになります。葉は互生し、羽状に1～2回裂け、裂片の先は円みがあって、独特の形です。茎、葉の裏、がくなどには、縮れた白い毛が多く生えています。

北海道から九州に分布しており、道端や草地、石垣などでみられる2年草です。

名前の由来については、橙黄色の液を出すので「草の黄」という説や、丹毒や疥癬、タムシなど皮膚疾患に薬効があるので「瘡（くさ）<sup>注4</sup>の王」という説、百薬の長の意味で「草の王」の説といろいろな説があります。

注4：瘡（かさ）とは、皮膚疾患の総称を指します。訛って「瘡（くさ）」とも呼ばれます。

## ○クロキ（黒木）

県内でみられるハイノキ科の植物の仲間、最初に咲くのがクロキです。

3～4月、葉の腋に密集して花をつけます。白い花は5つに深く裂け、直径8mmほど。雌しべは1個ですが、多数の雄しべが花より長く突き出ています。ハイノキ科はハイノキ属の一属のみで構成されていて、花は普通白色です。クロキは、冬に淡緑色の花を見ることがあります。何らかの刺激で春の開花期を待たずに咲いてしまった花ではないかと思っています。



▲クロキの花

実は長さ1cmほどの楕円形で、9月下旬頃から熟して黒紫色となります。

葉は先が尖らず、すべすべした厚い葉が互生します。縁はなめらかか、または目立たない低い鋸歯があります。落葉が黄色、若枝は淡緑色で角ばって稜があること、葉芽は枝先に1個つき、急に細くなって尖ることなどが特徴です。

ハイノキ科の植物の多くが多量にアルミニウムを含んでいて、アルミニウムの化合物のミョウバン類が得られるため、灰を媒染剤に用いてきました。それで『ハイノキ（灰の木）』の名があり、クロキの灰も利用します。

西日本の沿岸部に分布する常緑広葉樹で、高さは普通5～10mにもなります。県内では南部に生育し、熊野のアカマツ林にもよく見られます。

和名『クロキ（黒木）』の由来は、樹皮が黒褐色をしているからです。

## ○ケヤマハンノキ

春をみつけに出かけませんか。

この「ケヤマハンノキ」は、町内の山で最初に咲く花の一つです。

枝先に尾状に垂れ下がっているのが雄花穂（ゆうかすい）で、2～5個つきます。黄褐色の雄花が密集しています。紅色の卵型が雌花穂（しかすい）で、3～5個。雌花の色が何とも言えず美しく、春が来る度ルーペでのぞきます。

花は、葉が開く前に咲きます。葉に遮られずに、風に花粉を運んでもらえます。

芽吹くと、夏の終わり頃まで順に1枚ずつ葉を開いていきます。開いた葉で光合成をし、得たエネルギーで枝を伸ばし次の葉を開いていくのです。「順次開葉型」の典型です。

しかし、この方法では、芽鱗（がりん）に包まれた冬芽を作る余裕はありません。代わりに、春一番先に開く葉の托葉が厚くなって芽を守っています。

葉は互生で、長さ7～13cmの幅広い楕円形です。5～8個に浅く裂け、縁に鋸歯があります。毛は多いものから少ないものまであります。

果穂は長さ1.5～2.5cmの卵型です。小さな果実には狭い翼があり、秋落葉すると風に乗って飛んでいきます。

日本全国に分布する落葉高木で、溪流沿いによく生えます。やせ地でも育つのは、空中窒素を固定する根粒菌と共生しているからです。

雲母林道や、海上側などでは道路沿いでみられます。



▲ケヤマハンノキの花穂

## ○コツクバネウツギ

新緑の5月頃、新しく伸びた枝先に2～8個の花を咲かせます。花はラッパ状で、長さは1～2cmです。花は白、黄白色などであまり目立ちませんが、近付いて見ると下側の内面にオレンジ色の模様がある愛らしい花です。この模様は、この奥に蜜があることを昆虫に知らせる蜜標です。主に、マルハナバチの仲間が花を訪れ花粉を運ぶそうです。『ツクバネウツギ<sup>注5</sup>』そっくりの花ですが、少し小さいので、『コツクバネウツギ』の名が付いています。



▲コツクバネウツギの花

高さ1～2mの落葉低木で、葉や枝は対生し、よく枝を分けて茂ります。

この仲間は、がく片の数が見分けるポイントです。『コツクバネウツギ』は、がく片は2枚または3枚で果期にも残ります。細長い果実の先の2枚のがく片はプロペラのようなようです。がく片の幅はいろいろで、先が浅く裂けたりもします。

日本固有で、本州の中部地方以西、四国、九州に分布します。県内に広く生育し、町内でも普通にみられます。

注5：『ツクバネウツギ（衝羽根空木）』は、同じ形のがく片が5枚あり、羽根つきの羽根に似ていることから名が付きました。『コツクバネウツギ』より花期が少し早く、枝先に2個ずつ、長さ2cm余りの花をつけます。町内の分布はやや限られますが、呉地奥や三石山などでは多く見かけます。

## ○サンヨウアオイ（山陽葵）

最大の特徴は、花が地面すれすれで下向きに咲くことです。

花は4～5月に咲き、直径1.5～2cm、がくの裂片は3枚で紫褐色です。がくの下半部は白い壺形です。壺の上部は『ニホンカボチャ』のような形で6個の膨らみがあります。

葉は長い柄のあるハート形で、表面の模様はさまざまです。種類を調べるには、花の構造が最も大切です。

実は熟すと崩れ、種は根元に落ちるだけです。そのため、10m移動するのに、百年とも千年ともかかる言われます。私が調べた株は、20年で120cm離れた所に発芽しました。種にはアリの好む部分がありますが、アリが運ぶことは稀で、その距離も短いのです。



▲サンヨウアオイの葉と花

春の女神「ギフテウ」の幼虫が葉を食べて育ちますが、開発や観賞用などの採取で、絶滅が心配されています。

風に乗せて無数の種を遠くへ運ぶススキやタンポポなど、通常の植物が分布を広げることによって移動する速度を比べると、『サンヨウアオイ』などのカンアオイの仲間は極端に遅いです。

分布速度が遅いので、地域ごとに固有の種が自生しています。日本には約30種もありますが、産地から種が推測できます。

山陽地方西部に主に分布するので、『サンヨウアオイ（山陽葵）』の名があります。県内では南西部に限られ、町内の山ほぼ全域で見られますが、多くはありません。

## ○ジャケツイバラ（蛇結茨）

『ジャケツイバラ』は有毒植物です。種に毒を持ち、長さは約1cmです。

東南アジアに分布する『シナジャケツイバラ』の種はマラリアの薬にされます。

枝先に長さ20～30cmもの花序（かじょ）を直立させ、鮮黄色の花を多数つけるので、5月頃の花の時期には遠くからでもよく目立ちます。

花の直径は2.5～3cmになり、花弁は5枚で、上の1枚がやや小さく赤い模様があります。雄しべ10本は赤く、集まって突き出ています。一般的なマメ科の花の形と違うため、ジャケツイバラ科とする分類もあります。

豆果（とうか）は、長さ10cm、幅3cmほどもあり、扁平です。秋に褐色に熟して口を開けると目を引きまします。

葉は、2回偶数羽状複葉で互生します。

つる性の落葉低木で、宮城県・山形県以南に分布します。川岸や林縁などに生えて茂ります。町内では、初神の三谷川の古い堰堤で、5月後半に目の前に見事な花が見られます。

『ジャケツイバラ（蛇結茨）』の名は、つる状の枝が絡んだ様子を、蛇がとぐろを巻いた姿に見立てて付いたと言われます。

三重県の尾鷲節に「お前とならばどこまでも、奥山のサルカケイバラの中までも」と唱われているのは、『ジャケツイバラ』です。

県内でも広く『サルトリイギ』や『サルトリグイ』などと呼ばれており、枝や葉軸などにある鉤状の鋭いトゲに猿も捕まるとして付きました。



▲ジャケツイバラの花

## ○ショウブ（菖蒲）

『ショウブ』というと『ハナショウブ（花菖蒲）』を連想しがちですが、『ハナショウブ』はアヤメ科で全く別物です。

昔から混同され、万葉集などに“あやめ”と出ているのは、『ショウブ』です。端午の節句に葉を入れた「菖蒲湯」につかり、葉を軒に上げる風習は、枕草子などにも書かれています。強い芳香があり、葉が剣の形をしているので邪気を払うと信じられました。これらの風習は、中国から伝わったものと言われます。

葉で作った菖蒲兜や菖蒲刀、また、菖蒲酒、菖蒲占、菖蒲打ちなど多数の言葉が「広辞苑」に載っています。



▲ショウブの花序

北海道から九州の池のほとりや湿地に群生し、葉は高さ70～100cmで、中央に高い脈が一筋あり、冬は枯れます。

花は4月後半から初夏に咲きます。黄緑色の小さな花がびっしり密集しています。長さは5cmほどで、「肉穂花序（にくすいかじょ）」といいます。

葉の途中に花序が付いているように見えますが、花茎が葉に似ているため、花序の上は苞葉（ほうよう）です。

地下茎は太くて横に這い、節が多くあります。また、地下茎部分には芳香があり、健胃薬や神経痛、肩こりを治療する入浴剤に用いられます。

旧来の体系ではサトイモ科と分類されていましたが、新体系ではショウブ科として独立しました。雄しべに内向葯（ないこうやく）、雌しべに胎座（たいざ）があることで区別されています。

写真は呉地で撮影しました。

## ○シロツメクサ

『クローバー』の名で、よく知られており、特に「四つ葉のクローバー」は幸せを運ぶものとして喜ばれています。時に、五つ葉や六つ葉なども見られます。

普通は小葉が3枚で、ヨーロッパではキリスト教の教義の「三位一体(さんみいったい)」の象徴とされています。また、小葉が4枚のもの(四つ葉)は十字架に見立てられ、幸運の護符として尊ばれています。

アイルランドでは、国花になっています。

多年草で、茎は地をはって伸び節から根を出します。

葉は互生し、葉には白い斑のあることが多く、縁に細かい鋸歯があります。

花期は長く春から秋、時には12月にも咲いています。白い蝶形の小さな花が多数密集して、球状になっています。長い柄のある花を集めて、首飾りや冠を作って遊んだ思い出をもつ人も多いでしょう。

ヨーロッパなどが原産の帰化植物<sup>注2</sup>で、江戸時代に、オランダから長崎に運ばれたガラス器が壊れないよう、クッションとして乾燥させたこの草が詰められていたことから「詰草(ツメクサ)」の名があります。

詰草として持ち込まれたの時の種から始まり、今では日本全土で広く野生化しています。



▲シロツメクサの花

## ○スズメノヤリ（雀槍）

春です。冬の間、根生葉ばかりだった『スズメノヤリ』も、高さ10～20cmほどの花茎を伸ばしています。私も子どもの頃は、ずっと抜いて口にくわえタバコを吸うまねのようにして遊びました。

『スズメノヤリ』は、風に花粉を運ばせる風媒花です。雌しべの先の柱頭は3本に分かれており、1本よりも受粉するのに効率的です。

花は、まず白い柱頭が伸び出します。この時はまだ雄しべは成熟しておらず、雌性期の花です。柱頭がしなびて受粉する能力を失ってから、雄しべが成熟します。写真はその雄性期の花です。褐色をした6枚の花被片（かひへん）が開き、雄しべの黄色い葯（やく）から花粉が出ています。自分の花の花粉を避け、ほかの花の花粉を受粉する仕組みで、異なった遺伝子を得るための方法です。

果実は熟すと乾いて裂ける蒴果（さくか）で、蒴果では珍しく、1つの果実には種は3個しか入っていません。

種には多肉質の白い種枕（しゅちん）が付いています。アリなどが好む物質を含み、種を運ばせるのに役立つと考えられています。

日本全土に分布し、日当たりの良い草地に生える多年草です。花は4～5月頃に咲き、町内で普通にみられます。

『スズメノヤリ（雀槍）』の名は、花が丸く集まった姿を大名行列の毛槍に見たことからつけられました。この特徴的な姿で、近い仲間から簡単に区別できます。



▲スズメノヤリの果実

## ○タムシバ

4月に入った頃、真っ白いクリスマスツリーのような木が山に浮かび上がります。

葉の出る前に枝先に白い大きな花をつけるため、よく咲くと遠くからでも目立ち、多い所では雪が降ったように見えます。

花は純白で、花のすぐ下の小さな葉はありません。

葉は笹のような形をしており、裏は粉白色で、花も葉もない冬には小さな無毛の葉芽をみます。

果実が集まった集合果は拳（こぶし）のような形で、秋に熟すと果実が裂けて赤い種が白い糸で吊り下がります。



▲タムシバの花

アカマツ林などの尾根や斜面に生育し、県内に広く分布します。

『コブシ』<sup>注6</sup>と呼ばれていますが、町内の山にあるのは、この『タムシバ』です。よく似ていますが、いくつかの点ではっきり違っています。

葉に精油を含んでいて芳香があり、噛むとかすかな甘味があるため「噛む柴（カムシバ）」から『タムシバ』の名になったと言われます。『ニオイコブシ』の別名があり、枯れた枝葉でも匂います。

よく咲いた翌年は休みます。今年は花の多い年のはずなので期待しています<sup>※</sup>。

※この項目は2007年（平成19年）に作成したものです。

注6：『コブシ』は花がややクリーム色を帯び、花のすぐ下に小さな葉があります。また、葉の幅が広く、裏が淡緑色で、葉芽（ようが）には伏した毛があります。

やや湿地を好み、県内では北部の800m以上に少し分布しています。

## ○ダンコウバイ（檀香梅）

早春、葉が出る前に鮮やかな黄色の花をつけ、よく目立ちます。

雌雄異株で、写真は雄花です。雌花よりも花数がやや多く、花も大きめで、突き出た雄しべの先に花粉をつける葯（やく）が見えています。雌花よりも華やかです。

葉は先が3つに裂け、柄の方は怒り肩で独得の形です。ハート形の葉も混じっています。長さ5～15cmの幅広い葉で、3本の脈が目立ち、互生します。

実は直径7～8mmの球形で、秋に赤から黒く熟します。1.5～2cmの柄があります。

晩秋には美しく黄葉し、目を引きます。写真では、細長い葉芽と丸い大きな花芽ができています。

高さ2～6mの落葉樹で、関東以西の本州、四国、九州に分布し、県内全域で生育します。

町内でも広く3月末から4月初め頃にみられますが、多くはありません。串掛林道や、ゆるぎ観音から赤穂峠への道、初神から海田へ抜ける新峠、海上側の道沿いなどを花や黄葉の時期に訪ねてみましょう。

『ダンコウバイ（檀香梅）』は材に芳香があり、別名の『ウコンバナ（鬱金花）』は黄色の花から付いた名です。

また、谷間で早春に花開くことから、中国地方で広く『タニイソギ』の名があります。仲間の中では、花の集まりが大きく、枝が太いのが特徴です。



▲ダンコウバイの花

## ○ナツハゼ

小さな鈴がぶつかり合ってチリンチリンと澄んだ音が聞こえてくるようです。

5～6月、枝先に花軸を横に伸ばし、鐘型の花を下向きにつけます。長さ4～5mmの小さな花は5つに浅く裂け、裂片は少しそり返っています。普通赤みを帯びた淡黄緑色ですが、写真のような赤い花もあります。



▲ナツハゼの実

実は6～7mmの球形で、10～11月頃には黒く熟し、枝先に集まってぶら下がっています。甘酸っぱく美味しい山の幸で、ジャムや果実酒などにも利用します。かつて子どもたちは、むしり取っては食べ、口を青黒く染めていました。

葉は互生し、長さは3～5cmで、縁に細鋸歯状の毛、両面に粗い毛があって、ざらつくのが特徴です。

北海道から九州に分布し、花崗岩の土地を好み、アカマツ林などの乾いた所に多くみられる落葉低木です。

『ナツハゼ』の名は、初夏に『ハゼノキ』のように紅葉するので付いたとの説があります。秋の紅葉も美しく、花材として用いられます。

実の上部には、ウメの紋を型押ししたようなかわいい模様があります。これはがくの落ちた跡です。この部分を鉢巻に見立てた『ハチマキイチゴ』の方言が、庄原市や三次市など広く見られます。

町内では、『ケツツマリ』や『ドンツウ』、『イド』、『ダンバラ』などと呼ばれていました。

## ○ハイノキ（灰の木）

花期は5月頃で、滑らかで小さく上品な葉に、真っ白な花が映えます。深く5裂した合弁花で、直径1～1.2cmあり、雌しべは1個、雄しべは多数でよく目立ちます。葉の腋から花序を出し、3～6個の花をつけます。花には細長い柄があります。

果実は卵形で、長さ7～8mmで、10～11月に熟して、紫黒色になります。葉は互生し、無毛で、縁には低い鋸歯があります。表面は濃緑色、裏面は淡緑色で、のっぺりして側脈は見えません。葉先は長く尾状に伸びています。長さ1cmほどの葉柄があります。常緑で、枯れ葉は黄色になります。乾燥させた葉は、菓子や餅を黄色く染めるのに用いられました。

樹皮は暗褐色で、高さは普通5m、最大10mほどにもなります。



▲ハイノキの花

近畿地方以西から九州の屋久島まで分布し、県内では主に海拔400～700mの吉備高原面に分布し、モミ・ツガ林や溪谷のウラジロガシ林に多く生育します。

町内では、南東部の石嶽や石岳山などに分布がほぼ限られており、近隣では、広島市安芸区矢野地区の絵下山で多くみられます。

枝葉を燃やすと、染色の媒染剤に適した良質の灰が多量にとれるため、『ハイノキ（灰の木）』の名が付けました。

別名『イノコシバ』と呼ばれ、枝が細く粘り強いため、捕えたイノシシの足を縛るのに使ったからだと言われます。

## ○ハネミイヌエンジュ

この木の最も美しいのは春の芽吹きではないでしょうか。本当に、銀色に輝いています。

フジの葉に似た奇数羽状複葉で、互生します。小葉は鋸歯がなく裏は白っぽくて、ほぼ対生しています。

花期は8月頃で、枝先に数本の花軸を伸ばし、白い小さな蝶形花が多数並んで咲きます。1個の花の長さは7～8mmで、5枚の花弁のうち上の花弁（旗弁）が強くそり返り、がくに接しています。

実は扁平な莢（さや）で、両端が細くなります。上側の縁に幅1～2mmのひれ状の翼があり、そこから「ハネミ」の名が付けられています。

枝を折ると、ソラマメの葉に似た臭気があります。

中部地方以西に分布する落葉高木で、町内の山に点々と見られます。

中部地方以北には、とてもよく似た『イヌエンジュ』が分布しています。花は、長さ10～12mmと大きく、旗弁はそり返りますが、がくには接していません。莢の翼は0.8mmと狭いことなどの違いがあります。

材が似ているので、林業では区別せず、どちらも『エンジュ』と呼びます。辺材は淡黄色、心材は暗褐色で光沢があり美しく、床柱や木工品などに好んで使われます。

『エンジュ（槐）』は中国原産で、材は似ていますが、果実は数珠状にくびれ、マメ科の別の仲間に分類されています。



▲ハネミイヌエンジュの芽

## ○ヒガンマムシグサ

『ヒガンマムシグサ』は有毒植物です。

花茎を伸ばし、春の彼岸の頃から咲き始めます。奇妙な花に見えるのは、葉が変形したもので「仏炎苞(ぶつえんほう)」と呼ばれます。本当の花は、この中にあり、花びらのない小さな花が、花軸の周りをびっしりと取り巻いています。

サトイモ科の中で、このテンナンショウ属の仲間は、1つの株が雄株になったり、雌株になったりと「性転換」をします。それは、地下のサトイモに似た球茎の大きさで決まります。雌株では、短いトウモロコシ状に実が密集してつきます。実の集団を支える大きな株が必要だからです。秋には実が真っ赤に熟し、よく目立ちます。

葉は、鳥足状と呼ばれる形に7～13枚の小葉が並びます。小葉は真ん中が最も大きく、外側ほど小さくなります。この鳥足状の葉が2枚、花より下につきます。

『マムシグサ』と比べて花期が早く、咲き始めには葉が出ていないという特徴があります。

葉が出た後は、『マムシグサ』との区別が難しくなりますが、見分けるポイントとして、葉が花や実より下にあり、2枚の葉の高さがほぼ同じで小葉の数があまり変わらないという点などがあります。

関東以西の林内に生える多年草で、町内では稀に見られます。

茎のような部分の模様がマムシに似ていることから、『マムシグサ』の名が付いたとされています。



▲ヒガンマムシグサの花

## ○ヒメハギ（姫萩）

長さ1cmほどの小さな花で、『ハギ』の花に似ていますが、マメ科の『ハギ』の花とは全然つくりが違います。マメ科の花は上に目立つ花びらがありますが、『ヒメハギ』にはありません。翼のような左右の2枚も花びらではなく、5枚のがくのうち2枚だけが著しく大きく、花びらのように紫色に色付いているのです。本当の花びらは3枚で筒状になり、下側の先は細く裂け白い房状です。



果実は小さく扁平で、残ったがくが包んでいます。この頃、がくは緑色に変わっています。

種にはアリが好む物質が付いていて、アリに運ばれることで分布します。アリは巣に運ぶと、その物質だけ取って種は捨てるので、発芽には何の問題もありません。このように、アリの働きを巧みに利用して分布を広げています。

茎は根元で枝を分け、長さは10～20cmほどになり、下部は地面をはっています。

葉は互生し、長さ1～2cmです。

根はかたい土の中に長く伸びています。子どもの頃、何度か指で掘ろうとしましたが、成功したことはありませんでした。根は、咳止め、去痰に効果があるそうです。

日本全土に分布し、山野の日当たりの良い乾いた所に生える常緑の多年草で、町内では4～5月に咲きます。

和名は「姫萩」と書き、『ハギ（萩）』の花に似て、全体に小型なので名付けられました。

## ○ヒメヤマツツジ

4月中旬から5月下旬にかけて、ピンク色の背の低いツツジが咲きます。『ヒメヤマツツジ』です。

『ヤマツツジ』の変種で、姫の名が付くように、花や葉が『ヤマツツジ』より小さめで、花の直径は2～3cmほどです。花の色には濃淡があり、花の内側の上半部に斑があります。雌しべ1本、雄しべ5本が伸び出ています。



▲ヒメヤマツツジの花

春に、長さ2～3cm、幅0.8～1.6cmの葉が出ます。この春葉は、冬には落葉します。夏から秋にかけて、長さ0.5～1.5cm、幅0.2～0.5cmの細長い小さな葉が枝先に集まって出ます。この夏葉は多くは冬を越します。

広島県と山口県にのみ分布し、島や沿岸部、標高700mくらいまでの県南部に自生します。町内のほぼ全域にありますが、あまり多くはみられません。明るいやや乾いた所を好むようなので、串掛林道や雲母林道が観察しやすいでしょう。

かつては、『フジツツジ』と混同され、「安芸熊野の自然誌」※などでもフジツツジとして記載されています。

花の形などが異なり、葉もヒメヤマツツジより小さめです。

『フジツツジ』は紀伊半島と四国、九州の太平洋側に分布しており、藤色のツツジということからその名が付けられています。

母種の『ヤマツツジ』は、5月中旬頃から直径3～5cmの朱赤色の花を咲かせ、緑の中に鮮やかに映えます。

※「安芸熊野の自然誌」1996年発行

町史等書籍として、産業観光課において3,500円（町外の方は7,000円）で販売しています。

## ○フキ

フキノトウが春の訪れを告げています。

多数の苞葉に包まれた蕾（つぼみ）の集合体です。

キク科では珍しく、雌株と雄株があり、雌花は白色、雄花は黄白色です。咲き終わると、雄花は枯れてしましますが、雌花は花茎が30～45cmにも伸びます。

熟すると白い綿毛のついた種子が、風に乗って飛んでいきます。

葉は普通、花が終わって出てきます。大きくなると直径15～30cmほどになります。

本州、四国、九州に分布する多年草で、流れの近くのやや湿った所を好みます。太い地下茎を横に伸ばし枝を分けて繁殖します。畑のそばにあるのは、栽培されて広がったのでしょう。

古くから栽培される、数少ない日本原産の野菜です。店で売られているのは、アキタフキの栽培品で、愛知早生ふきが有名です。アキタフキは、本州北部から北海道などに自生し、葉柄は2m、葉は直径1.5mにもなります。

『フキ』は、よく知られる山菜で、特有のほろ苦さは、消化を助け食欲を増進します。咳止め、痰切りの効果があるそうです。

フキノトウは、フキ味噌や汁の実、天ぷらに、葉柄は、煮物やキャラフキ（伽羅蒨）、砂糖漬けに、葉は、佃煮にと、余す所なく使えます。

『フキ』の語源は、大きな葉を、物を拭くのに使ったので「拭き（ふき）」とも言われます。「蒨」の漢字は、路傍の草を意味しています。



▲フキノトウ

## ○フデリンドウ

春に咲く小さな『リンドウ』の中で、町内で見られるのが、『フデリンドウ（筆竜胆）』です。

花は4～5月に咲き、長さは2～2.5cmほどです。茎の上部に数個の花をつけますが、時には20個以上つけた株も見ます。色は普通青紫色で、変異があります。日が当たらないと花は開きません。曇りや雨の日、夜は傘を畳むように花を閉じます。これは、リンドウの仲間の多くに共通する性質です。虫が訪れず花粉を受粉できない時や、雨が花の中に入り傷むような時には花を閉じるのでしょう。



▲フデリンドウの花

茎の高さは5～10cmで、葉は柄がなく対生します。根元に大きな根生葉がないのが特徴です。果実は、花から少し突き出し先が2片に裂けています。種は微細で、秋に発芽し冬を越して春に咲き実を結んで命を終える越年草です。移植は困難で、種をまいても発芽もしないそうです。さまざまな条件が整って命をつなぐことができるのです。

東アジアの温帯に広く見られます。日本では、ほぼ全土に分布し、山の草原や林縁などに生えています。

町内では10数ヶ所見っていますが、多くはなく、4月後半頃よく花を見ます。写真は串掛林道で昨年4月25日に撮影したものです※。

蕾や閉じた花の形が筆の穂先に似ていることからこの名が付けましたが、『リンドウ』の仲間はどれも同じような形をしています。

※この項目は2013年（平成25年）に作成したものです。

## ○ヘラオオバコ（笹大葉子）

葉は、すべて根生葉です。長さ10～30cmで、先はとがり、数本の葉脈がやや平行に並んでいます。

花期は4～8月で、高さ20～70cmの花茎が何本も直立します。花茎には縦に5本の溝があり断面は星形です。花穂（かすい）には小さな花がびっしりと密集していて、下から上へ順々に咲いていきます。まず、白色の細い雌しべが伸び出し、それが枯れると雄しべが成熟します。雄しべの先には花粉を出す葯（やく）があり、花穂から突き出た白っぽい葯がひらひらして目立ちます。花粉を風に運んでもらう風媒花です。

蓋果（がいこ）と呼ばれる果実は、熟すと横に裂けて蓋が取れ、黒い種を2個出します。



▲ヘラオオバコの花穂

ヨーロッパ原産の多年草で、世界中に広く帰化しています。日本には、江戸末期の渡来と言われ、現在では全国各地に分布している帰化植物<sup>注2</sup>で、県内でも太田川沿いの土手など大群生しています。

町内では、初神や平谷などで数株見ているだけです。また、『ヘラオオバコ』のほかに、『オオバコ』、北米原産の『ツボミオオバコ』がみられます。

『ヘラオオバコ（笹大葉子）』という名は、葉の形がヘラのようなのだとして、その名が付けました。

## ○ホオノキ

やっと、真上から花を見ることができました。

ホオノキは高木で枝先に大きな葉をたくさん広げ、その上に花をつけるので、すぐそばにあっても花を見ることはむづかしいのです。

5～6月に咲き、直径15～20cmもある大輪の花は、芳香があります。緑色を帯びた外側の3枚ががく片で、黄白色の9枚ほどが花びらです。中心の深紅色の部分に雌しべの集まりがあります。その下の黄白色が雄しべの葯（やく）で、花粉を出すところです。1日目に雌しべ、2日目に雄しべが開きます。1つの花は短命で雄しべはすぐにぱらぱらと散ってしましますが、次々と長い間咲き続けます。

葉は長さ20～40cmもあり、日本の木の中で単葉としては最大級です。昔から食べ物を盛ったり包んだりと利用してきました。

集合果は、長さ10～15cmくらいあり、重さで枝が垂れるほどです。

種は1つの果実に2個ずつ入っていて、熟して裂けると赤い種が白い糸で吊り下がります。

材は白くて軟らかく均質で狂いが少ないため、家具、刀の鞘、版木、まな板、下駄の歯などに用います。また、日本特有の落葉高木で、樹皮は薬用に使われます。

名の「ホオ」には包むという意味があります。今でも餅やご飯などを包み、特に葉の上に味噌などをのせてあぶる朴葉味噌（ほおばみそ）は有名です。



▲ホオノキの花

## ○ヤマザクラ

文学や美術に多く登場し、日本人に最も愛されている「サクラ」は、サクラ属の中のサクラ亜属の総称です。日本に約10種、変種などを含むと約100種が自生し、園芸品種は200～300種あるといわれます。

現在、「サクラ」といえば『ソメイヨシノ』が浮かびますが、古くは『ヤマザクラ』を指していました。サクラの中では『エドヒガン』に次いで寿命が長く、大木になります。

新葉とともに咲く姿に風情があり、本居宣長の和歌「敷島の 大和心を人問はば 朝日に匂ふ 山桜花」は有名です。

奈良県吉野山はヤマザクラの名所です。



▲ヤマザクラの花

花は1つの芽から2～5個咲き出ます。開花は田の神の出現を示すとされ、農作業の目安としたり、開花状況で豊作かどうかを占ったりしました。

実はほぼ球形で、直径は7～8mmほどで、5～6月に黒っぽく熟します。

葉裏は白っぽく、葉柄上部に2個の蜜腺があります。花やがく、冬芽などは無毛です。

材は緻密で香りがあり家具や彫刻、版木などに、チップは燻製作りに使います。樹皮は独特の光沢があり、丈夫で、茶筒や小箱など細工物に利用します。

宮城県以西に分布し、県内最大の巨木は東城町（現在の庄原市）・千鳥別尺にあり、幹囲4.5m、推定400年です※。

町内一の大木は幹囲2.5m、道上奥の石岳山登山口から少し進んだ左にあります※。

※この項目は2011年（平成23年）に作成したものです。

## ○ルリタテハ

黒い地色、前翅に白い紋、外側にルリ色の帯、ルリタテハです。

これに似たチョウやガは、日本にはいません。メスはオスよりやや大きめで、ルリ色の帯も広めです。開張50～60mmの中型の蝶です。翅の裏は茶褐色で、樹皮や枯れ葉に似ています。止まって翅を閉じていると見つけにくく、保護色となって身を守るのに役立ちます。



幼虫は橙赤色と黒色のまだら模様で、黄白色の枝分かれた多くのトゲで武装しています。ユリ科のホトトギス類やサルトリイバラ、ユリ類などの葉を食べます。

蛹（さなぎ）は、尾端をほかの物に付けて逆さに垂れ下がります。

成虫は樹液や熟した果実の汁などを吸い、普通は花には止まりません。敏感ですぐ飛び立ち、飛び方も速くて捕らえにくいのですが、また元の場所に戻って止まる性質があります。前脚は退化していて、止まる時には使えません。オスは地面や葉の上に止まって占有行動をとり、自分の縄張りに仲間のオスが入って来ると追い出します。

日本西南部の暖地では、普通6～11月頃に3～4回羽化を繰り返します。秋型の成虫で越冬し、冬でも暖かい日には活発に飛び回る姿を見ることがあります。

日本各地に広く分布し、県内全域の市街地から山地までみられますが、成虫の数はあまり多くはありません。



## 【夏】

### 植物

○アカイボカサタケ	32
○アカメガシワ	33
○ウマノスズクサ	34
○ウラジロマタタビ	35
○ウワミズザクラ	36
○エゴノキ	37
○オカトラノオ	38
○ガヤドリナガミツブタケ	39
○ガンピ	40
○クズ	41
○セリ	42
○ネムノキ	43
○ノアズキ	44
○ノビル	45
○ハキダメギク	46
○ヒナタイノコズチ	47
○ヤブジラミ	48

### 昆虫

○エゴノネコアシアブラムシ	49
○オオトモエ	50
○ゴマダラカミキリ	51
○ジュウジナガカメムシ	52
○ダイミョウセセリ	53
○チャドグガ	54
○ハイイロチョッキリ	55
○ベニシジミ	56

## ○アカイボカサタケ

キノコは傘の形をしたものが多く見られますが、傘の形には理由があります。傘形のキノコは、傘の内側のヒダなどの部分で胞子を作ります。傘は、大事な胞子を守っているのです。

この『アカイボカサタケ』は、全体が鮭肉色から朱紅色のキノコです。普通傘の上にイボのような突起がありますが、イボは目立たないものもあります。傘は、鐘形から円錐形で直径1～4cmで、湿ると周辺部に放射状の線が現れます。ヒダは、ややまばらです。

柄は長さ5～10cmで中空、毒性は不明です※。

7～9月、林内の地上に生えます。



▲アカイボカサタケ

イッポンシメジ科のキノコは、日本で約50種記録されていますが、研究が進めば100種以上あると予想されています。

町内では、13種記録があります。町内で記録のあるキノコは共通して、胞子紋<sup>注7</sup>が淡紅色で、胞子が多少とも角張っている特徴があります。近縁種の黄色の『キイボカサタケ』や白色で日本特産の『シロイボカサタケ』は時に『アカイボカサタケ』と混生し、3種とも町内でみられます。また、この仲間には、全身空色の『ソライロタケ』や『コンイロイッポンシメジ』などがあり、この2種は三石山と土岐城山で一度ずつ見っていますが、県の準絶滅危惧種に指定されています。

注7：胞子紋とは、柄を取って傘を白い紙の上に置き、紙の上に胞子が積もってできる紋様のことです。

※この項目は2012年(平成24年)に作成したものです。近年の図鑑では、有毒とされており、食べることは推奨されていません。

## ○アカメガシワ

今、長い柄のある手のひらほどの大きな葉を広げ、枝先に小さな花が多数集まって咲いているのは、この『アカメガシワ』です。

花は6月中旬から7月に咲きます。雌雄異株で、雌花も雄花も花びらはありません。写真は雌株で、普通3本ずつ雌しべが伸び出ています。雄株では花の集まりがより大きくて目立ち、淡黄色の多くの雄しべを持つ花が密集して華やかです。



▲アカメガシワの花

実は秋に熟すと3つに裂け、艶のある黒い種を出します。鳥が好んで食べます。

葉は互生し、名の通り、芽吹いた小さな葉が赤く鮮やかです。10倍のルーペで見ると、1か所から数本ずつ出ている赤い毛が密生しているのがわかります。葉が赤いのは、若葉を有害な紫外線から守る働きがあると考えられています。秋に黄葉します。

葉には、葉柄の付け根に1対の腺体があり、糖分を含んだ液が出ていて、よくアリが訪れています。

落葉高木で、樹皮は灰褐色。縦に浅く裂けた部分の色が濃く特徴的です。

樹命が短く、食用のアラゲキクラゲが群生しているのをよく見ます。ヒラタケ栽培の原木に使います。山野で普通に見られます。

大きな葉は、『カシワ（柏）』と同様に食物をのせたり包んだりして利用しました。そのため、『ゴサイバ（五菜葉）』や『サイモリバ（菜盛葉）』の別名があります。

## ○ウマノスズクサ（馬鈴草）

花は、実にユニークです。6～8月、葉の脇から1個ずつ花をつけます。長さ3cm余りで、花びらはなく、がくが筒状でラッパ形に開き、先は斜めに切られたような形です。内側は紫褐色で軟毛があります。花が曲がっているのは、もぐりこんだ昆虫を簡単に出られないようにして、受粉を確実にするために役立っています。

果実の直径は1cmほどです。

つる性の多年草で、畔や川の土手などに生えます。葉は互生し、長さ3～7cmで、茎や葉は無毛です。地上部は、冬には枯れます。



球形の果実が、馬の首につける鈴に似るので『ウマノスズクサ（馬鈴草）』の名が付いています。

ウマノスズクサ属は、『アリストロキア』の学名がつけられています。出産の痛みを和らげるため、この属の植物が用いられたことによる名です。『ウマノスズクサ』も、根を虫や蛇の解毒に、果実は解熱、せき止めに利用されました。

この仲間には、アリストロキア酸という毒性の強い物質があり、多くの動物は食べられません。しかし、『ジャコウアゲハ』の幼虫は、ウマノスズクサ属の植物だけを食べます。『ジャコウアゲハ』は、この物質に対する解毒酵素を持っているので平気なのです。そのうえ、産卵の刺激物質として利用しています。そのため、この属の植物が絶滅すると、ジャコウアゲハも絶滅してしまうのです。

## ○ウラジロマタタビ

葉は互生し、葉柄は長く、しばしば淡紅色を帯びています。

落葉つる性の木で、つるは長く伸び、20～30mにも達し、直径は10～15cmほどになります。表皮は褐色で、裂けてはがれているのが特徴です。

つるは腐りにくく粘りがあるのでイカダを組んだり、吊り橋に利用したりしてきました。有名な徳島県の「祖谷（いや）のかずら橋」は、サルナシやウラジロマタタビのつるを使って作られています。

花は5～6月に咲き、5弁の白い梅のような花は直径1～1.5cmです。雌花は葉の脇から1個ずつ、雄花や両性花は数個集まって付いています。雄しべは多数で、花粉を出す葯（やく）が暗紫色です。

実は親指の先ほどの俵型で、熟すと緑がかった肉色をしています。毛のない小型のキウイのようです。



▲ウラジロマタタビの花

関東以西の山地に自生し、町内ではマタタビより多く見かけます。

「サルナシ（猿梨）」は、猿が好んで食べる梨のような実という意味です。まさにその名のごとく、石岳山で食べた完熟した実がとても美味しかったのを覚えています。果実酒にも珍重されます。

マタタビの名が付いていますが、マタタビ※ではなくサルナシの変種で、葉の裏が粉白色のものです。『ウラジロサルナシ』の名前ならわかりやすいのと思います。

※マタタビの葉は薄く、花の頃白変して目立ち、花の葯は黄色で、実は先のとがった円筒型をしています。

## ○ウワミズザクラ

花は町内では4月下旬頃にみられます。今年伸びた枝先に、白い花が多数密集して咲きます。花びらは5枚で、雄しべ約30本と雌しべ1本が花びらより長く突き出し、全体の形は瓶を洗うブラシの様です。ブラシ状の花の下に数枚の葉が互生するのが特徴です。

果実は7～8月、黄、赤、黒と熟し甘くて食べられます。果実酒は鎮咳、疲労回復に効果があるそうです。新潟では、蕾や若い果実を穂のまま塩漬けにし「杏仁子（あんにんご）」の名でお茶請けなどにされます。

晩秋、小枝の大部分が脱落し、枝に落枝痕ができます。翌春、その節の横から小枝が伸びるという特性があり、枝は節くれ立って、葉を落とした冬の姿は特徴的です。紅く艶があり美しい冬芽も魅力があります。

ほぼ全国の山に分布する落葉高木です。町内では原山や三谷川などに見られますが、多くはありません。初神の倉田医院近くの川岸が分かりやすい観察地点です。

名の由来は、昔、亀の甲を焼き、できた裂け目で吉凶を占う「亀卜（かめうら）」に、この材の上面に溝を彫って使ったので『ウワミゾザクラ（上溝桜）』だと言われます。また、鹿の肩甲骨の裏側に溝をつけて焼く古代の占いで、この木を燃やしたため『ウラミゾザクラ（占溝桜・裏溝桜）』との説もあり、どちらも、『ウワミズザクラ』に転訛したとされています。

古名は「波々迦（ははか）」といいます。



▲ウワミズザクラの実

## ○エゴノキ

細長い雌しべが残る若い実です。やがて雌しべは落ち、灰白色の実は、長さ1cmほどになります。若い実は砕いて川に流し、麻痺して浮いてきた魚を捕る魚毒として使いましたが、今は禁じられています。

実は秋に熟すと縦に割れ、1個の褐色の種を出します。種は脂肪分が多く、野鳥のヤマガラなどの好物です。

材は硬くて軽く、粘りがあって折れにくいので、鎌や鎚の柄などに用いました。和傘の轆轤に使ったことからロクログイの名もあります。

花は町内では、5月中旬から6月中旬に咲きます。花には芳香があります。私が初めて花を見たのは、香りに誘われて見上げた時でした。白い花が枝からたくさん垂れ下がり、緑の葉と調和して初夏の爽やかさを運んでくれます。

花は直径2.5cmほどで5つに深く裂け、中心に黄色い葯（やく）の雄しべが集まっています。散り際も美しい花です。

ほぼ日本全土に分布する落葉高木で、町内にも広く生育しています。公園や庭にも植えられています。

実にはエゴサポニンが含まれ、嚙むと喉を刺激して「えごい」ことから、『エゴノキ』の名が付いています。サポニンは水に溶けると泡立つので、洗濯にも利用しました。それで、『セッケンノキ』の別名があります。



▲エゴノキの実

## ○オカトラノオ

花が咲く6～7月は梅雨の頃、爽やかな花が蒸し暑さを忘れさせてくれます。茎頂に直径1cmほどの白い花を多数密集してつけ、下から上へ咲いていきます。花は一方に片寄り、長さ10～30cmの先が垂れた太い花序になります。

花は合弁花で、深く5つに裂けています。雄しべは5個、雌しべは1個です。

多年草で、地下茎を横に長く伸ばして繁殖します。そのため、たいてい群生していて、不思議なことに花序はほとんど同じ方向に傾いています。花が終わると、花序は直立します。

果実は、ほぼ球形で直径約2.5mmになります。熟すと褐色になりがくが残っています。

茎は普通枝を出さず1本で直立し、高さは40～100cmになります。

葉は長楕円形で先がとがり、茎に1枚ずつ螺旋状に付きます。若芽、若葉は茹でて水に晒し食べられます。

日本全土、中国などに分布し、日当たりの良い草地や林縁に普通に見られます。中国では、利尿や月経不順などの薬、植物油の原料、家畜の飼料に用いました。

白い花や姿が似た『ヌマトラノオ』は、湿地に生えます。花序は直立し垂れません。花序も葉も細く優しげです。

『オカトラノオ』は、花を虎の尾に見立て、丘に生えるところからこの名が付けました。庄原市では、葉を乾燥しタバコの代用としたので『ヤマタバコ』と呼んでいました。



▲オカトラノオの花

## ○ガヤドリナガミツブタケ

『ガヤドリナガミツブタケ』は、ガの成虫を宿主として寄生する「冬虫夏草<sup>注8</sup>」で、世界に広く分布しています。

ガの表面から角状で長さ3～7mmの小さなキノコが群生します。今までに8回見っていますが、7回が町内です。どれもやや小型のガに寄生していました。

写真は成熟したキノコで、2009年6月に初神で撮影しました。キノコ上部の淡黄色の粒々は「子のう殻」と呼ばれ、中の「子のう」という袋状の細胞で胞子が作られます。



▲ガの成虫に寄生した様子

本来の冬虫夏草は、中国南部の山岳地帯で蝶類の幼虫に生える種類です。不老長寿の薬として有名ですが、現在では抗がん性などの薬効も研究されています。

麦角菌科の冬虫夏草属の仲間は世界に300種以上あり、半数は日本にも分布します。ほとんどは昆虫やクモなどに寄生するため「虫生菌」と呼ばれます。

町内では、スズメバチの成虫から発生した『ハチタケ』、地中のセミの幼虫から発生した『オオセミタケ』などを見えています。

寄生された昆虫は死んでしまうので、虫生菌は昆虫の天敵です。ミツバチなどの益虫を守るため、また逆に害虫の駆除のため、虫生菌の研究が進められています。

注8：冬虫夏草とは、冬には虫で、夏には草（キノコ）になるという意味で、古代中国で付けられた名前です。

## ○ガンピ（雁皮）

高級和紙の原料として有名な雁皮の花です。枝の先に数個から十数個が集まって付きます。花弁はなく、がくが筒状で長さ8～10mmで、先は4つに裂けます。淡黄色で、伏した毛が密生しています。がくは枯れても残り、小さな果実を包んでいます。

葉は互生し、鋸歯はなく、伏した絹毛が生えています。落葉低木で、高さ1～2mになります。今年伸びた枝は枝を分けず、枝先は冬に枯れます。樹皮は濃い褐色で艶があり、桜の樹皮に似ています。枝はポキッと折れません。樹皮が切れないのです。引っ張っても剥がれるだけで切れません。長くて丈夫な繊維があるからです。



▲ガンピの花と葉

子どもの頃、父に教えてもらった本です。樹皮を手際良く、するすると剥がして束ねていました。

「雁皮紙（がんびし）」は、滑らかで光沢があり、虫害に強く防湿性にも優れています。証紙や紙幣などに使われました。奈良時代から造られていたと言われます。栽培は難しく殆ど自生品を利用します。

古くは「雁皮紙」を「斐紙（ひし）」と呼び、原料の木を「紙斐（かみひ）」と言いました。それが転訛して、「カミヒ」が「カニヒ」となり、『ガンピ』になったそうです。

日本固有で、東海地方以西、四国、九州に分布し、日の当たるやせ地に生えます。花は5月後半～6月前半頃に咲き、町内でやや普通に見られます。

## 〇クズ（葛）

夏から秋にかけて咲く『クズ』は秋の七草の1つで、「万葉集」など多くの歌に詠まれています。

花穂は長さ10～20cmもありますが、長い柄をもつ大きな葉に半ば隠れるように咲いています。花は紅紫色の蝶形花で、甘い芳香があります。実は枝豆に似て、黄褐色の毛が密生しています。

葉は大きな3枚葉で、日射しの強い時には葉を立て受光量を減らし、葉の温度や水分の蒸発を調節します。

多年生のつる植物で、10m以上もつるを伸ばします。地面を這うつるでは節毎に根をおろします。繁殖力旺盛でたちまちのうちに生い茂り、ほかの草木を覆ってしまいます。つる植物は自分の体を自分で支えないため茎をあまり強くする必要がありません。その分つるをどんどん伸ばすことができるのです。飼料用として輸入したアメリカでは最近厄介者になっているそうです。

根は人の腕ほどにも大きくなり、多量のデンプンを含んでいます。葛粉をとり、食用に、また、葛根湯（かっこんとう）など薬用に用います。

クズの名は吉野の「国栖（くず）」が有名な葛粉の産地であったことに由来すると言われます。

最近では本物の葛粉は上等の和菓子に使われるくらいで、一般にはジャガイモなどから採ったデンプンで代用されています。



▲クズの花

## ○セリ

暑い盛り、緑の中の白い花には清涼感があります。

日本全国の水田、湿地、溝などに生える無毛の多年草で、高さは20～50cmほどになります。葉は互生し、1～2回ほど羽状に分かれ、粗い鋸歯があります。地下茎を伸ばして繁殖します。密集している様子が競り合っているのが見えるので名が付いたと言われます。

花は7～8月頃枝先に咲きます。5弁の小さな花が傘形の集団を作り、それが集まって全体として直径3～5cmの集団となります。

果実は無毛、楕円形をしており、長さ約3mm程度で、2本の長い雌しべが残っています。果実はセリ科の分類で重要です。



▲セリの花

『セリ』は栽培の歴史も古く、927年の「延喜式」に記載があります。数少ない日本原産の野菜の1つです。

セリ科植物は世界に3,000種、日本に75種あり、町内では現在13種記録しています。

“春の七草”で有名な『セリ』は、爽やかな味と香り、シャキシャキした歯触りが好まれ、お浸しや和え物、鍋物などに使われます。葉や茎だけでなく根も食べられます。古くから食用とされ、「古事記」や「万葉集」などにも出ています。

春の『セリ』が一番ですが、この頃間違える恐れがあるのは、有毒のキンポウゲ科キツネノボタンなどです。『セリ』のような芳香はないので匂いを確認するといいでしょう。

## ○ネムノキ（合歡木）

万葉集や俳句などにも詠まれ昔から親しまれている『ネムノキ（合歡の木）』。

花を近くで観察してみましょう。10～20個の花が1か所に集まって咲いています。花びらは花の基部にあり、淡緑色で小さく5枚です。美しい淡紅色で糸状に多数伸びているのは雄しべで、長さ3～4cmもあります。雄しべの先は黄色で、しゃれたアクセントになっています。雌しべは1本で、白くて雄しべより長めです。よく見ると、中央の花だけ雄しべが途中から横に開いていて、花もやや大きめです。



▲ネムノキの花

葉は夕方になると向かい合った小葉を合わせて閉じ、さらに羽状の葉も垂れ下がって眠ったようになります。小葉や羽状の葉のつけねのふくらんだ部分を葉枕（ようちん）といいます。葉枕の細胞の膨圧が変化することで、就眠運動が起こります。

葉と逆に、花は夜に咲きます。写真は15時頃の様子です。花が開き、縮んでいた雄しべが伸び始めています。夜には、ぴんと長く伸びます。花は、1日ほどでしおれてしまいます。

東北地方まで分布する、南方系の植物です。そのため芽吹くのが遅く、ほかの木が葉を広げ、花を咲かせている5月になって、やっと冬の眠りから覚めます。『ネムノキ』の名は、ここから付いたとも言われます。

町内では6月下旬から7月下旬に咲きます。

## ○ノアズキ（野小豆）

たいていの花は左右対称で均整のとれた形ですが、この花は何とも奇妙な形をしています。そのアンバランスな面白さに、しばらく花を見つめてしまいます。

花は8～9月頃咲き、長さは1.5～1.8cmほどです。黄色の蝶形をした花びらを、旗弁といいます。旗弁は左右で大きさが違います。その前にある竜骨弁も翼弁も左側に片寄って付いています。竜骨弁は白い角のように曲がっています。



竜骨弁の中に雌しべと雄しべが入っています。虫が止まるとその重みで花粉が押し出され、虫の背中に付く仕組みになっています。大切な花粉を効率的に使っているのです。

豆果は長さ4～5cm、幅8mmほどのさや豆のような形をしています。葉は互生し、裏には赤褐色の腺点が散らばっています。葉やつる、豆果などに短い軟毛があります。

本州や四国、九州の日当たりの良い土手や林縁などに生える、つる性の多年草です。

花がよく似たものに『ヤブツルアズキ』があります。豆果は細長く無毛です。町内では確認されていません。

『ノアズキ（野小豆）』の名は、花や葉がアズキに似ているので付きましたが、実際の豆果は、アズキの細長い豆果とは全然似ていません。

また、葉が『クズ』に似た形で、小さいので『ヒメクズ（姫葛）』の別名があります。

## ○ノビル（野蒜）

和名は『野蒜』と書きます。「蒜（ひる）」とは、ネギやニンニクなどユリ科ネギ属の総称です。噛むとひりひりと口を刺激するので「ひる」と言うそうです。ネギ属の大きな特徴は、ネギ坊主のような花序です。



▲ノビルの花

花は5～6月に咲きます。茎は高さ50～100cmにもなり、花の一部または全部が「ムカゴ」になるという目立った特徴があり、写真のように花がたくさん咲いているのはむしろ稀です。

花は直径1cmほどで白色から淡紫色をしています。

ムカゴは紫褐色のほぼ球形です。ムカゴは実ではなく、こぼれ落ちて繁殖する肥大した芽のことで、栄養繁殖といえます。

多年草で、葉は晩秋に出て冬を越し夏に枯れます。長さ20～30cm、幅3mmほどの線形です。地下には直径1～2cmの白いネギ状の鱗茎（りんけい）があり、そばに小さな鱗茎をつくって増えます。

葉も鱗茎も食べることができます。ネギに似た匂いがし、茎の立たない4月頃が適期です。鱗茎は生で味噌をつけて食べ、また天ぷらやぬたなどにします。採り尽くさないで小さいものは埋め戻し、掘り返してはいけない田畑の畔（あぜ）では採取しないなどマナーを守りましょう。

縄文時代にはすでに食用とされ、「古事記」や「万葉集」などにも載っています。

日本全土に広く分布し、人里近くの日当たりの良い道端や土手、草地などに多く見られます。

## ○ハキダメギク（掃溜菊）

一年草で、草丈は10～50cmになります。写真は咲き始めの姿で、この後何回かふたまたに枝を分けて伸びます。葉は対生で毛が多く、縁には粗い鋸歯があります。

花期は6～12月です。花の直径は5mmほどで、中心に黄色の筒状花が多数集まり、まわりに白い舌状花が5個あります。舌状花の先は3つに裂けていて個性的です。筒状花だけでなく、舌状花にも冠毛があるのが特徴の1つです。冠毛は種を運ぶパラシュートの役割をします。

熱帯アメリカ原産で、世界中に広がっている帰化植物<sup>注2</sup>です。日本では戦後分布を広げ、現在では全国で見られます。

私が最初に見たのは、萩原で平成4年でした。今では、あちこちの空き地、畑のそばなどに群生しています。

『ハキダメギク（掃溜菊）』の名は、ゴミ捨て場で発見されたことに由来しています。牧野富太郎博士が、東京で発見し命名しました。しかし、「牧野新日本植物図鑑」のハキダメギクの図は、コゴメギクを描いたものです。名が入れかわってしまったようで、現在のハキダメギクは、北村四郎博士に従って名を当てられています。

コゴメギクは、やせ型で毛が少なく舌状花に冠毛がありません。私はまだ見ていませんが、呉市で太刀掛優先生が確認されています。



▲ハキダメギクの花

## ○ヒナタイノコヅチ

日向に生え枝を分けて茂り、対生する葉は厚くて毛が多く力強い多年草です。

根は太く、漢方で「牛膝（ごしつ）」と呼び薬用にします。利尿、腰痛などに効果があります。

花は小さく目立ちません。花粉を虫に運んでもらう虫媒花ではなく風に運んでもらう風媒花なので、虫を呼ぶための大きな花も鮮やかな色もないのです。

8～9月、枝先や葉の腋から花軸を伸ばし下から上へ咲いていきます。淡緑色のがく片は5つあり、雄しべは5つ、雌しべが1つあります。花が終わると、がく片は閉じ下を向き花軸に圧着します。

がく片の外側には刺状の小さな苞があります。実が熟すと、これで動物や人の衣服に引っ掛かり付いていく方法で種を散布しています。

茎は四角で紫褐色を帯び、高さは50～100cmほどです。

本州、四国、九州に分布。町内でも普通に見られます。

『ヒナタイノコヅチ』とよく似て日陰に生える『ヒカゲイノコヅチ』があります。『ヒナタイノコヅチ』に比べ、全体にほっそりして、花穂は細くまばら、葉は薄くて毛が少ないのが特徴です。

しばしば、茎の節が大きくふくらんでいます。この節がふくらんでいるのは虫が寄生してできる「虫こぶ」です。

これを猪の膝に見立て『イノコヅチ（猪子槌）』の名があります。同様の語源で、別名『フシダカ（節高）』とも呼ばれ、漢名では漢方の名前と同じく『牛膝（ごしつ）』といいます。



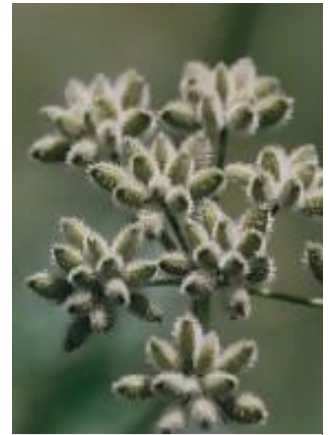
▲ヒナタイノコヅチの花

## ○ヤブジラミ（藪虱）

6～7月頃、セリに似た白い花が咲きます。枝先に1か所から数本の枝が出て、それぞれに4～13個の小さな花を密集してつけます。

葉は羽状に複雑に裂け、ニンジンの葉に似ています。

写真は若い実です。実は熟すと褐色になり、衣服に絡みついて本当に厄介です。しかしこれは、植物にとって、分布を広げるための種子散布は大切な営みです。風や水の流れ、動物などを利用します。動物を利用する方法の1つが、動物の体にくっついて運んでもらう作戦です。粘液でくっつく植物もありますが、『ヤブジラミ』は実の全面に先の曲がったトゲ状の毛を密生させています。



▲ヤブジラミの実

日本全土に分布する二年草で、高さは30～80cmほどになります。

セリ科のヤブジラミ属の仲間は世界に15種、日本に2種あり、町内ではその2種とも普通に見られます。

藪に生え、虱（しらみ）のようにとりつくので『ヤブジラミ』の名が付いています。何とも気の毒な名前に思えますが、この草にとっては作戦どおりの効果があることを示す名誉な名前かもしれません。

『オヤブジラミ（雄藪虱）』は、実が『ヤブジラミ』より大きいので付いた名です。『ヤブジラミ』と比べ、4～5月と花の開花が早く、花や実が少なく密集してつかないこと、茎や実が紫色を帯びることなどで区別することができます。

## ○エゴノネコアシアブラムシ

枝先に、長さ3cmほどのバナナ形の虫こぶが集まって付いています。

『エゴノキ』につき、猫の足の形なので、『エゴノネコアシ』と呼ばれます。昔から知られ、ドイツの有名な博物学者シーボルトの著書にも載っています。



▲エゴノネコアシアブラムシの虫こぶ

虫こぶは、主に昆虫が植物に産卵し寄生することで植物の組織が異常に大きくなったり変形したりしたもので、「虫えい」とも言います。日本には、1,400種以上の虫こぶがあるそうです。

この『エゴノネコアシ』は、『エゴノネコアシアブラムシ』の虫こぶです。

春、卵から孵化（ふか）した幼虫は全部メスです。成長すると、交尾しないで卵はメスの体内で孵化し、メスの幼虫を産みます。こうしてメスだけで増えていきます。虫こぶも大きくなり、内部はクローンのアブラムシでいっぱいになります。

写真は6月に撮ったものです。7～8月、虫こぶの先端が開き、翅のある成虫が出て、イネ科のアシボソに飛んでいき、オスも産まれて交尾します。秋、メスはエゴノキに戻って冬芽に産卵し、卵で越冬します。季節によって寄生する植物を変えたり、単性生殖と有性生殖をしたりと生態は実に複雑です。

植物に寄生し、虫こぶをつくって隠れ家と食料を得た昆虫たち。しかし、完全に安全とは言えません。虫こぶに産卵管をさして、中の幼虫に寄生するハチの仲間などもあるからです。

## ○オオトモエ

前翅に巴模様の目立つ紋があるところから、『トモエガ』と呼ばれる仲間があります。その中で一際大きいので、『オオトモエ』の名が付いています。

翅を開くと10cm近くもあります。黒褐色の地に白い線が美しく、縁が波状で特徴のあるガです。



林内の細い道を歩いているときによく出会います。年に2、3回、5～8月にかけて羽化します。町内では5月と7月の記録が多く、特に7月は5月の倍近くの数を記録し、1日に10匹以上見ることもあります。

幼虫は赤褐色で無毛、第1腹節の側面に眼状紋があります。サルトリイバラやシオデなどの葉を食べるそうですが、町内にシオデは分布していません。大きなガなので、幼虫も大きくなり目に付くと思われそうですが、今までサルトリイバラにそれらしい幼虫を見たことがありません。昼間は茎や葉の裏などに潜んでいて、夜間活動するのではないかと思われそうです。

この仲間の『オスグロトモエ』の幼虫は夜行性です。また、『カキバトモエ』の幼虫は大きくなると、昼間は食樹のネムノキの幹で静止し、夜に葉を食べるそうです。

北海道函館以南に分布します。「広島県昆虫誌」によると、県内では『オスグロトモエ』、『カキバトモエ』も多数記録されています。

町内では、『オオトモエ』のほかに、『シロスジトモエ』、『ハグルマトモエ』も少数確認しています。

## ○ゴマダラカミキリ（胡麻斑天牛）

漢字では「胡麻斑天牛」と書きます。「天牛」は、カミキリムシの漢名です。この和名は体の模様から付いたようで、「ゴマ（胡麻）マダラ（斑）」が「ゴマダラ」に変わったと思われます。

黒くて光沢があり、白い斑紋が散らばっています。

成虫は6～8月に現れますが、私の記録では7～8月に多く見えています。体長は25～35mmほどです。触角は長く、メスは体長の約1.2倍、オスは体長の2倍近くにもなります。前胸両側に突起があります。

メスは樹皮をかんで傷をつけ、1粒ずつ卵を産みつけます。

成虫、幼虫ともに害虫として有名です。イチジク、モモ、ミカン類などの果樹や、クヌギ、ポプラなど数十種の生木を食べます。

日本全土、台湾、中国などに分布する普通種です。

カミキリムシ科に属する昆虫は、世界に3万種以上、日本には900種以上が確認されていて、県内に281種、町内で44種が記録されています。

大あごは強くて鋭く、髪の毛や細い枝なども切ることができるので「カミキリムシ（髪切虫）」の名が付いたようです。

幼虫は乳白色で前胸部は大きく脚は退化しています。材の中を食べながら進みトンネル状に穴をあけるので「テッポウムシ（鉄砲虫）」と呼ばれます。

トンネルの中で蛹（さなぎ）になり、羽化した成虫は体が硬くなると穴を掘って外に出ます。細長い体の形は、材の穴の中を進むのに適しています。



▲ゴマダラカミキリの成虫

## ○ジュウジナガカメムシ

体長9～10mmほどで、黒と橙色のはっきりした模様です。背に橙色の十字形の帯があるため、この名が付いています。

幼虫も成虫も、ガガイモ科のガガイモやカモメヅルなどの汁を吸います。ガガイモは長めのハート形の葉が対生する、つる性の多年草で、8月頃、毛が密生し、直径1cmほどの星形をした淡紅色の花が咲きます。このガガイモは町内では草むらなどに普通に見られます。

『ジュウジナガカメムシ』は、北海道、本州、四国、九州に分布します。「広島県昆虫誌」によると、広島市や大竹市、福山市など数か所の記録があるだけと、県内の一部に生息となっており、「安芸熊野の自然誌」にも町内の記録はありませんでした。

私が初めて見たのは、平成11年7月に萩原で、ガガイモの葉に、多数が重なり合うように集まっていました。その後も、町内で5～11月にかけて数回、阿戸町では1回観察しています。写真は平成17年11月、ガガイモの果実に付いていたものです。

ナガカメムシ科は、体長数mm～15mmほどのカメムシの仲間で、日本で100種余り、県内で35種が記録されています。町内では、『ヒメナガカメムシ』、『オオメカメムシ』、『ヒゲナガカメムシ』、『モンシロナガカメムシ』の4種が採集されていて、本種を追加すると5種になります。



▲ガガイモに集まる  
ジュウジナガカメムシ

## ○ダイミョウセセリ

小型のセセリチョウ科の中では大きめなので「大名」の名が付きました。『セセリチョウ』は仲間の総称です。

林の周囲や溪流沿いに生息し、草原にはいません。低い葉の上に、翅を開いて止まる習性があります。

翅を開くと35mm前後で、黒褐色の地に白い斑紋が帯状に並んでいます。後翅にも白い帯が明瞭にあるのは近畿以西に棲む関西型です。中部地方以北では白い帯はないかまたは不明瞭です。



▲ダイミョウセセリの成虫

幼虫は、ヤマノイモやナガイモなどの葉を食べます。成虫のメスは、これらの葉の表に1個ずつ産卵します。

幼虫は葉の一部を折り返し、自分の糸で綴って巣を作ります。頭部は黒色、胴部は緑を帯びた灰白色です。脱皮を繰り返して長さ25mmほどになり、冬を越します。幼虫は蛹（さなぎ）を経て羽化し、チョウになります。チョウの発生は寒冷地で年2回、関東地方の平地およびそれより南の暖地で年3回と異なっています。

国内では、北海道渡島半島以南、九州まで分布し、県内では全域に生息しています。

町内では、5～9月にチョウを見えています。

セセリチョウの仲間は、蜜を吸う時しきりに口吻を動かします。これを「搦る（せせる）」というので、名付けられました。

町内のセセリチョウ科は「安芸熊野の自然誌」に8種記録されています。

## ○チャドクガ（茶毒蛾）

ふと見ると、庭のツバキやサザンカの葉がなくなっているのに気付くことがあります。『チャドクガ（茶毒蛾）』の幼虫が葉を食べているのです。チャノキの葉も食べますが、これらはツバキ科の樹木です。気付いたら、すぐに小枝ごと除去しましょう。

幼虫の体には毒毛があり、触れると激しいかゆみを生じ発疹ができます。幼虫が脱皮した殻にも毒毛が残っています。成熟した幼虫が作る繭（まゆ）にも、また羽化した成虫にも毒毛が付着しています。早期発見、早期除去が大切なのです。



▲チャドクガの幼虫

小さな幼虫は、頭を揃えてびっしり並んでいます。1匹ずつの方が目立たないと思うのに、なぜ集団で生活するのでしょうか。昆虫館に尋ねてみると「集団でいることで、毒毛の効果が大きくなりますし、幼虫を食べる鳥が気持ち悪く感じて避けることがあります。また、ツバキやサザンカなどの常緑の硬い葉は、集団でいっせいに食べる方が葉を弱らせることができ、食べやすくなるなどの利点があるのではないのでしょうか。」と教えていただきました。ちなみに、大きくなった幼虫は、分散して葉を食べるようになります。

成虫のガは普通黄褐色で、翅を開くと長さ25～30mmほどになります。

県内では年2、3回発生をくり返し、卵で越冬します。卵は、食樹の葉裏や枝などにまとめて生みつけられ毛で覆われています。

## ○ハイイロチョッキリ

地面に緑色の木の葉や枝先がたくさん落ちているのに気づき、不思議に思ったことはありませんか。それは、昆虫の仕業であることが多いのです。

写真は、『ハイイロチョッキリ』という体長9mmほどの小さな甲虫が切り落としたコナラの枝先です。8～9月に、コナラ、アラカシなどで見えています。



成虫は、頭の先が象の鼻のように長く伸び、先端に鋭いあごをもっています。

交尾したメスは、ドングリの付いている小枝をかみ切っていきますが、落ちないように一部を残します。次にドングリのお椀のような部分「殻斗（かくと）」から深く穴をあけ、産卵管を入れて卵を産みつけます。産卵が終わると、穴のまわりの殻斗を削って穴の入口をふさいでいきます。卵をねらう敵から守るためです。最後に残しておいた部分をかみ切って枝先を落とします。

ドングリには、長さ1.2 mmほどの小さな卵が1つ入っています。孵化（ふか）した幼虫はドングリの中を食べて成長します。ドングリは、幼虫の家であり食べ物でもあるのです。

成長した幼虫は、土の中にもぐって、土団子のような部屋をつくって蛹（さなぎ）になります。羽化した成虫は翌年の6月頃から現れます。

体の色は黒から暗褐色ですが、灰黄色の毛を密生していることから、灰色の名が付いています。

## ○ベニシジミ

『ベニシジミ』が、ヒメジョオンの花で蜜を吸っています。

タンポポ、シロツメクサなど、いろいろな花に来ます。空き地や野原などの明るい草地に多く、低く飛んでは、すぐに花や葉に止まります。止まっている時、翅は半開です。開いた時の長さは27～35mmで、メスはオスよりやや大きく、翅の形も丸みがあります。

写真では、翅を閉じていて裏が見えています。前翅の表は橙赤色で黒い紋があり、縁に黒褐色の帯があります。後翅は黒褐色で、縁に橙赤色の帯があります。7月頃から現われる夏型は、黒褐色の部分が大きく広がり橙赤色の部分が減っています。



▲ベニシジミの成虫

ヨーロッパやアジアの中・北部に広く分布し、日本でも各地で見られます。町内でみられるシジミチョウ科の中で最も一般的なのがこの『ベニシジミ』です。

暖地では3～4月頃から11月頃まで、羽化と産卵を4～6回くり返し、幼虫で越冬します。幼虫の食草は、スイバ、ヒメスイバ、ギシギシなどです。葉肉を食べ、片側の表皮を薄く残します。

幼虫は3回脱皮して成長し、蛹（さなぎ）になります。蛹の背が割れ羽化が始まると、ぬれて縮んでいる翅に体液を送りこみ、翅を伸ばします。翅が乾くまでは飛べません。襲われても逃げることはできないのです。羽化も命がけの仕事です。





## 【秋】

### 植物

○アキノキリンソウ	60
○アケボノソウ	61
○アメリカセンダングサ	62
○オニフスベ	63
○カマツカ	64
○キクバヤマボクチ	65
○キツネノマゴ	66
○コウヤボウキ	67
○コバノガマズミ	68
○ゴンズイ	69
○シロオニタケ	70
○センボンヤリ	71
○ツチアケビ	72
○ヒイラギ	73
○ヒメヤシャブシ	74
○ホソバママコナ	75
○マルバノホロシ	76
○マンネンタケ	77
○ムラサキシメジ	78
○ヤクシソウ	79
○ヤマジノホトトギス	80
○リンドウ	81

### 昆虫

○キイロスズメ	82
○クスサン	83
○セスジスズメ	84
○メンガタスズメ	85

## ○アキノキリンソウ（秋の麒麟草）

秋に咲く黄色い花の代表格『アキノキリンソウ（秋の麒麟草）』。花の美しさが『キリンソウ』に匹敵し、秋に咲くので名付けられたようです。しかし、『キリンソウ』は、ベンケイソウ科の植物なので、花の色のほかには共通点はありません。

麒麟（きりん）とは、中国古代の想像上の動物で、ビールの麒麟の図に使われています。

別名「アワダチソウ（泡立草）」と呼ばれ、小さな花が多数集まって咲く姿が酒を作る時の泡立つ様子に似ているので付いた名です。

北米原産の『セイタカアワダチソウ』の名のもとになっています。

茎は直立し、高さは30～80cmにもなります。葉は互生し、下部の葉は長い柄がありスプーン状で、上部の葉は小さくなります。

茎の先に穂状に花をつけます。1つの花の直径は13mmほどですが、実は外側に舌状花、内側に筒状花が集まってできています。

キク科のアキノキリンソウ属は、ほとんどが北半球に分布し、北米には80種以上もあるそうです。アメリカでは、この属の仲間を「黄金の鞭（むち）」を意味する『ゴールデン・ロッド（Golden Rod）』と呼んでいます。

『アキノキリンソウ』は、本州、四国、九州に分布し、日当たりのよい山野によく生える多年草です。

町内では、9月下旬から11月頃に、田の畔（あぜ）や林道などでよく見かけます。一緒に紫色のヤマハッカ、黄色のヤクシソウも咲いています。



▲アキノキリンソウの花

## ○アケボノソウ（曙草）

『アケボノソウ（曙草）』の名は、花の清々しい印象が、ほのぼのと明ける夜明けの空「曙（あけぼの）」を連想させて付いたと言われます。

花は直径1.5～2cmで、花弁は5枚に見えますが、深く5裂している合弁花です。よく見ると、4裂の花が混じっていることもあります。クリーム色を帯びた白色で、裂片の幅の広い部分に2個の黄緑色の円い腺体があり、蜜が出ています。裂片の先には、黒紫色の小さな斑点が散らばっています。



▲アケボノソウの花

花期は9～10月ですが、時に8月初旬から花を見ることもあります。

二年草で、1年目は長い柄のあるオオバコに似た根生葉を広げています。2年目に茎を伸ばし、上部の葉脈から対生する枝を出します。秋、茎や枝の先に、柄のある花を多数咲かせます。花期には根生葉は枯れています。

花を咲かせ、結実して種を作り、その株は命を終えます。花の時に美しいからと切り取ってしまうと、子孫を残すことはできません。

全体に無毛で、茎は直立し高さ60～90cmで、4稜があり、角ばっています。葉は対生し、鋸歯はなく、3本の主脈が目立ちます。

ほぼ日本全土に分布し、湿地や沢沿いなどに生えます。

花に斑点のないものが稀にあり、『フナシアケボノソウ』と呼ばれます。今までに1か所だけ、町内の雲母川（きららがわ）の谷で見えています。

## ○アメリカセンダングサ

一年草で、茎は紫褐色を帯び、やや角ばっています。

花は9～10月頃に咲きます。細い枝を分け、枝先に1つずつ黄色い頭花をつけます。頭花は1つの花に見えますが、実は多数の小さな花が集まったものです。

頭花をとり囲んでいるのを総苞片（そうほうへん）といいます。10個ほどの総苞片が緑色で大きく、葉のように見えます。学名の種を示す『フロンドーサ』は「葉のような」の意味で、総苞片の特徴が名になっています。



▲アメリカセンダングサの花

頭花は、やがて褐色の実の集合体になります。子どもの頃、これを取って投げ合って遊びました。ぴたっと相手の衣服にくっつくのです。実はくさび形で、先が2本の角のように伸び、逆向き刺が生えています。刺さると抜けない仕組みになっているのです。動物や人の衣服にくっついて、種を運んでもらう作戦です。

葉は3～7枚ほどの小葉をもつ複葉で、対生します。小葉は先がとがり、揃った鋭い鋸歯が並んでいます。

北アメリカ原産で、大正時代に日本に入ってきた帰化植物です。今では、ほぼ全国に広がっていて、田の縁や溝、川岸など湿った所でよく見かけます。

近縁のずんぐりした姿の『タウコギ』に比べ、1～1.5mと背が高いため『セイタカタコウギ』の別名があります。牧野富太郎博士の命名です。

## ○オニフスベ（鬼贅）

今秋、呉地の叔母の庭に突如として現れた巨大なキノコ。「ボールが転がってるのかと思った。今まで見たこともない。」と驚いています。私も実物は初めてです。大きい方は直径32cmもありました。



▲上から見たオニフスベ

図鑑では、直径30cmほどで2.2kgとの記述がありました。私が調べたものは、直径10cmが150g、直径18cmが600gでした。最大では、直径60cmにもなるそうです。

表面は、なめし皮のような手触りで弾力があります。まるでバレーボールのようです。内部は白いはんぺん状となっており、中の肉まで真っ白い幼菌は食べられます。外皮をむいてフライに、さっとゆでて酢漬けにして食べると美味しいそうです。私も食べてみようと思いましたが、切ってみると中心の方は既にカラシ色に変色していたので止めました。

胞子が成熟するにつれて褐色の臭い液を多量に出し、乾燥すると外皮ははがれ落ち、褐色の老菌となります。やがて内皮も破れ、褐色で古綿状の胞子塊が露出し、膨大な量の胞子が風に運ばれて飛んでいきます。

オニフスベ属の仲間は世界に4種、日本には本種だけで日本特産です。もともと珍しいキノコですが、発生数が減っていて広島県の準絶滅危惧種に選定されています。

和名では『鬼贅』と書きます。ふすべとは、瘤の古称です。

※この項目は2011年（平成23年）に作成したものです。

## ○カマツカ（鎌柄）

晩秋、カマツカの紅葉が美しく目を引きます。

枝先に真っ赤な果実が集まって付いています。長さ8mmほどの楕円形で、先端が黒くなって残っています。甘酸っぱいこの実は、食べることができ、果実酒にもできます。

長い柄には、皮目が多くぷつぷつしています。

『鎌柄』の名は、丈夫で折れにくいため鎌の柄に用いたことから付けました。ナタやハンマーなどの柄にも賞用されます。

別名『ウシコロシ』とも呼ばれ、この木で牛の鼻輪を作ったからという説や、牛の鼻輪を通す孔を開けるのに使ったからという説があります。



▲カマツカの实

花は5月頃、葉がすっかり開いてから咲きます。直径8～9mmの白い花が短枝の先に10個以上も集まってつきます。円い花びらが5枚、雄しべは20本です。

葉は互生、短枝では束生します。先は尖り、揃った細かく鋭い鋸歯があります。

高さは3～4m程度で、高いものでは7mにもなる落葉樹です。

カマツカの葉は初め毛がありますが、しだいに取れほぼ無毛となります。ワタゲカマツカは葉裏などに白い綿毛が残るもので、ケカマツカは中間的なものです。しかし、変異が多くはっきり分けるのは困難です。

ほぼ日本全土に分布し、町内でも普通に見かけることができます。晩秋の山を楽しみませんか。

## ○キクバヤマボクチ（菊葉山火口）

細い針状のイガグリのような形で夏を過ごし、10～11月頃に花を開きます。花の色は淡黄色か淡紫色で、渋い美しさがあります。

『キクバヤマボグチ（菊葉山火口）』の名は、下部の葉が裂け菊の葉に似ていて、山に生え、火口（ホクチ）に用いたことで付きました。火打ち石から火花を受けるのに、葉の裏に密生する白い綿毛を採って使ったのです。

草地や林縁に生え、高さ70～100cmほどの多年草です。

近畿以西の本州、四国、九州に分布。県内に広く生育しますが、沿岸部では稀、島では見られません。町内では、あまり多くはないので大事にしてほしい草です。

若芽は餅に入れることもあり、根や若い茎も食用にできます。

キク科ヤマボクチ属は、世界に4種、日本に3種あり、県北部の山地では、『ハバヤマボクチ（葉場山火口）』が見られます。

キク科の花は、一つの花に見えるものが、実は小さな花（小花（しょうか））の集合体です。小花は小さいながら雌しべ、雄しべなどをもつ立派な花なのです。小花の集合体を包んでいるのが総苞（そうほう）で、全体を頭花（とうか）と呼びます。

キクバヤマボクチは、茎の上部で細い枝を分け、枝先に直径3.5cmほどの頭花を一つずつ付けます。

キク科の頭花は実に多様で種子植物の中で最も種類が多く2万種を超え、最も進化した科とされています。



## ○キツネノマゴ

枝先の花穂を狐の尾に見立て、花穂が小さいので孫を付け『キツネノマゴ』と言われます。

尾に見えるのは披針形のがく片や小苞片で、透明な縁どりと長い毛が密生しています。

花期は8～10月で、花は一つの花穂に1～3個ずつ、ぽつぽつと咲きます。花の長さは7～8mm程度の先が上下に分かれた唇形花で、上唇は小さく白色、下唇は大きく淡紅色です。稀に、全体白色のものがあります。

果実は細長く、熟すと2片に裂けて落ちます。この時、フック状の射出器が4個の種を弾き飛ばします。

がくは深く5裂と図鑑にありますが、今回見つけたものは、20倍のルーペで調べてみても、がく片は4個しか確認できませんでした。

茎の下部は倒れて、地面に接すると節から根を出します。高さは10cmくらいから、高いものは80cmにもなります。茎の断面は六角形で、多くの枝を出します。

葉は対生で、長さ2～6cmほどです。倍率の高いルーペで見ると、葉の表に短い線形の結晶がやや平行に多数並んでいます。乾くと突出してよく分かります。鍾乳体と呼ばれるカルシウムの結晶です。

本州以南の道端、耕地の周りなどに生える一年草で、町内でも多く見られます。射出器や鍾乳体をもつことなどが、キツネノマゴ科の特徴の一つです。



▲キツネノマゴの花

## ○コウヤボウキ（高野箒）

今年伸びた枝先に、白いリボンを束ねたような優美な頭花を1個つけます。小さな花が13個ほど集まっていて、1個の花は細長い筒状で5つに深く裂け、裂片がそり返っています。9月下旬から11月上旬に咲き、頭花の直径は約2cmです。

タンポポのような冠毛をつけた冬の姿も魅力的です。冠毛は褐色ですが、時に美しいピンク色があります。

落葉低木で高さ60～90cmで、今年伸びた枝には丸みのある葉が互生し、2年目の枝には節毎にやや長い葉が3～5枚集まってつきます。枝は2年で枯れます。



▲コウヤボウキの花

『コウヤボウキ（高野箒）』の名は、高野山で竹箒の代用としたことから付いたと言われます。真言宗総本山の高野山では、弘法大師の願により、柿や桃、竹などは利益につながるとして植栽を禁じられたため、竹箒の使用が禁じられたとも伝えられています。また、弘法大師が大蛇を竹箒に封じ込めたため、とも伝えられています。

古名は『玉箒』で万葉集などに出ています。新春、皇后が蚕の床を掃き、蚕神を祭り、五穀豊穡を祈ったそうです。

関東地方より西に分布し、山のやや乾いた所に生え、町内でも広く見られます。

2年目の枝の節毎に頭花をつける『ナガバノコウヤボウキ』は町内にはありません。キク科は最も進化した仲間で、木は少なく、日本には数種あるだけです。

## ○コバノガマズミ

よく目立つ赤い実は、鳥を誘い分布を広げるのに効果的です。私も毎年ひとしきり眺めた後、一粒二粒口に運び「秋」を味わいます。実は甘酸っぱくて、果実酒にすると美しい赤色です。



▲コバノガマズミの実

まず、『ミヤマガマズミ』、次に『コバノガマズミ』、約1か月遅れて『ガマズミ』が咲きます。

『コバノガマズミ』の花期は4月後半から5月前半で、先が5裂した小さな白い花が枝先に多数集まり、白い雄しべが突き出ています。清楚な花ですが、匂いは生臭くていただけません。虫を呼び寄せる匂いなのです。

葉は対生し艶がありません。細かい毛に覆われていて優しい手触りです。葉柄が短く、ひげ状の托葉があるのが『ガマズミ』などとの違いです。

材は折れにくく鎌や鋏などの柄に、枝は柔軟性があって、たき木などを束ねるのに使われました。

以前、父に尋ねると、町内では「イッシュウ」と呼ばれるのだと教えてくれました。これは、広島県と岡山県に共通する方言で、『ミヤマガマズミ』などと区別せず、すべてこの名で呼ばれています。

関東以西、四国や九州の山に普通に生える落葉低木で、葉に艶のある『ミヤマガマズミ』と共に町内でもよく見られます。

葉に粗い毛のある『ガマズミ』は、もさもさした手触りで、町内ではやや稀です。

## ○ゴンズイ

名前を言うと、魚のゴンズイと関係があるかとよく聞かれます。

ゴンズイという魚は、背びれなどに毒があり、食用にできず役に立ちません。そして、このゴンズイという木は、材がもろく役に立たないため、ゴンズイの名をあてたとされます。

また、熊野権現の護符を田畑に立てる牛王杖にこの木を使い、牛王杖が訛って『ゴンズイ』となったなど、いくつかの説があります。

庭園などに植えられます。

一番の魅力は、なんといっても果実でしょう。濃い緑色の葉と赤い果実で、半月状のこの実は9～10月に熟して裂けると、黒くて艶のある種が現れます。コントラストの効いた鮮やかな美しさです。

花は5～6月に、枝先に円錐花序を作り、直径4mmほどの小さな黄白色の花が多数咲きます。がく片と花弁は5個ずつで、果実の時にも残っています。

葉は奇数羽状複葉で対生し、細かい鋸歯があります。

冬芽は普通枝先に1対あり、赤くて太く特徴的です。

樹皮は黒緑色で、灰褐色の皮目が縦に並んで縮緬状のシワとなり、個性的です。

落葉樹で高さ3～6mで、稀に高さ10m、直径20cmにも達します。

日本の関東以西、台湾など東アジア特産で、ミツバウツギ科のゴンズイ属は、この1種だけです。町内で見られるのは、川角の大原ハイツの近くに大木があります。



▲ゴンズイの実

## ○シロオニタケ（白鬼茸）

『シロオニタケ（白鬼茸）』の名は、白色の大型で、とげ状のイボが表面全体を被っている様子から付きました。

写真は幼菌で、これから傘が開いていきます。丸い山形、さらに開くと中高の扁平な傘になります。傘の直径は6～20cmもあります。

傘の下には、白色から淡いクリーム色をしたヒダが密に並んでいます。ヒダは初め白い膜でカバーされています。傘が開くと膜質のツバとなって茎に垂れ下がり、離れて落ちます。

茎は10～20cmの高さで、根元は徳利のようにふくれています。



▲シロオニタケの幼菌

夏から秋にかけて、特に8～9月によく見ます。ほぼ日本全土に分布し、町内でもいろいろな山で見かけます。ブナ科のシイ、カシ、コナラなどの林や、アカマツの混じった林の地面に生えます。

よく似たキノコに、『シロオニタケモドキ』や『ササクレシロオニタケ』がありますが、これらのツバは茎に残ります。ほかにもいくつか似たものがあります。

この『シロオニタケ』は、食用にはなりません。

テングタケ科の仲間は、一部食用キノコもありますが猛毒菌が多く注意が必要です。全体白色で、茎にツバがあり、根元にツボを持つ『ドクツルタケ』や『シロタマゴテングタケ』は、たとえ食べたのが1本だけだったとしても致命的です。清楚な姿に騙されてはいけません。

## ○センボンヤリ（千本槍）

年に2回、春と秋に、姿も役割もまったく異なる花をつけるユニークな草です。

秋には、何本もの花茎を30cm以上に伸ばし、先に1個の頭花をつけます。頭花を包んでいる部分を総苞といいます。秋の頭花は閉鎖花で、多数の種を飛ばします。

閉鎖花は、花が開かず蕾の内部で、雌しべが自分の花の花粉を受けて種を作ります。虫や風などに頼らず、自分だけで確実に種を作ることができます。

『センボンヤリ』は、閉じた総苞の中で小花が開き受粉するので、厳密には少し違いますが、外側から花は見え、これも閉鎖花と呼ばれています。

『センボンヤリ（千本槍）』の名は、この秋の姿を多数の毛槍が並んだ様子に見立てて付けられました。

春、4～5月頃、花茎が短く直径1.5cmほどの白い花を開きます。閉鎖花に対し、開放花とい

います。開放花は、ほかの花の花粉を受粉して、遺伝子の異なる種を作る役割があります。

白い花びらの裏が紫色を帯びているので、『ムラサキタンポポ』の別名があります。多年草で、葉は地面に広げた根生葉だけです。羽状に裂け、春は小型、秋は大型です。根生葉だけなので背丈の高い草むらでは負けてしまいます。山道のそば、明るい林で見られます。

日本全土に分布します。



▲センボンヤリ（秋）

## ○ツチアケビ

秋、真っ赤な実がいくつもぶら下がっているツチアケビに出会った人は、誰でも思わず足が止まってしまいます。

土の中から出てアケビのようだと『ツチアケビ』の名が付いています。『キツネノトウガラシ』や『山の神の錫杖（シャクジョウ）』などの別名もあります。

実は、肉質で長さ6～10cmで、熟しても裂けません。一つの実に一万数千個の種が入っています。ラン科としては大きな種で翼があります。普通、実が熟すと裂け、ほこりのように微細な種が数十万個入っているランの仲間では異例です。

葉緑素をもたないので、光合成をして自分で養分を作ることができません。菌類からすべての養分を得て生活する腐生植物です。

地中の根茎は太くて長く横に伸びていて、根の中に『ナラタケ』の菌糸束をとりこんでいます。抜いてきても種をまいても育てることはできません。珍しくてもそっと見るだけにしてください。

茎は高さ30～100cmで、太くて硬く、上部で枝を分けます。

6～7月頃に、黄褐色の花を多数つけます。花の直径は2cmほどで半開します。

ほぼ日本全土に分布する多年草で、主に落葉樹林にやや稀に生えます。町内では稀で、3か所で見えますが、1か所は整備により、今はもうありません。写真は、新宮の山で撮ったものです。



▲ツチアケビの実

## ○ヒイラギ（柎、疼木）

11～12月にかけて、純白の清楚な花が咲き上品な匂いがします。花は4つに深く裂け、花弁がそり返ります。雄しべは2本、雌しべは1本あり、写真は雄花で、雌しべは短く退化しています。雄しべ雌しべの発達した両性花には、翌年の6～7月頃に、長さ1cm余りの楕円形の実が黒紫色に熟します。

葉は対生し厚くて硬く、鋸歯は鋭くとがったトゲ状です。



▲ヒイラギの花

『柎』や『疼木』と書きますが、葉のトゲに当たると疼ぐ（ひりひり痛む）ことから名が付いています。

節分には、ヒイラギの枝にイワシの頭を刺して門や戸口に飾る風習が、関東以西の各地にあります。これは、葉のトゲが鬼の目を突き、侵入を防ぐと考えられたようです。

『オニノメサシ』や『メツキシバ』といったの方言が和歌山県などで見られます。

悪い病いを防ぐ魔除けの力があるとも信じられ、古くから庭に植えられてきました。

老木では、葉は楕円形で鋭いトゲはなくなり、まったく別物のように見えます。

常緑の小高木です。標準の高さは3mほどで、時に高さ10m、直径30cmにも達します。

新宮区屯田の益永邸には直径57cmほどの大木があり、町の天然記念物に指定されています。

町内の山で見かけるのは幼木が多く、たまに高さ3mほどの木もありますが、大木は見たことがありません。

## ○ヒメヤシャブシ（姫夜叉五倍子）

卵形の果穂が数個、枝から垂れ下がっています。果穂がごつごつしているので「夜叉（やしゃ）」、ヌルデの虫こぶ（五倍子（ふし））と同様にタンニンが多く黒色の染料に使うため「夜叉五倍子（やしゃぶし）」と呼ばれ、その中でも、果穂や葉などが一番小さいため「姫」が付いています。

子どもの頃、父に名前を尋ねると『ハゲシバリ』だと教えてくれました。ハゲ山の砂防、緑化に用います。

やせた土地でも成長が速くよく育つのは、空中の窒素を固定する根粒菌と共生しているため、葉の窒素含有量が多く光合成の能力が優れているからです。



▲ヒメヤシャブシの実

晩秋、葉は緑色のまま落ちます。葉の窒素や緑色の色素を枝に回収しないため、養分の多い落葉です。

やせた土地でアカマツと一緒に植えると、アカマツだけ植えた場合と比べ、アカマツが著しく成長した例があります。それで、「肥料木」とも呼ばれます。

花期は3月後半から4月。雄花穂は長さ4～6cmの尾状で、枝先に1～3個ほど垂れ下がります。雌花穂は、その下に3～6個つきます。雌雄同株の風媒花です。

果穂には、両側に翼をもつ小さな果実が多数入っていて、風で散布されます。

葉は互生し、長さは5～10cmで、側脈が平行に多数並び20～26対もあるのが特徴で、縁は細かい重鋸歯です。

## ○ホソバママコナ

分布が限られているうえに稀で、絶滅が心配されている植物です。

中国地方西部と四国北部、九州北部に分布し、県内では竹原市と東広島市の一部に記録があります。町内でも1か所と、隣の阿戸町でも見えています。

日当たりの良い草地や林縁に生育しますが、定期的な草刈りなどによって生育環境が維持されることが必要なようです。

高さは25～50cmほどで、葉は対生します。「細葉」の名の通り葉が目って細長いので、ほかのママコナの仲間から区別できます。花の下にある小さな葉状の苞に、とげ状の長い鋸歯があるのも特徴です。

花期は8～10月で、町内では9月頃に咲いているのが見られます。ピンク色のロート形の花は、先が上下に大きく口を開け、唇形花と呼ばれます。

「飯子菜（ママコナ）」の名は、花にご飯粒のような白い部分があることから付いたようです。若い種子は米粒そっくりです。これが由来だとも言われますが、「飯子（ままこ）」なら米粒よりご飯粒ではないかと思われま



▲ホソバママコナの花

ママコナの仲間は、半寄生の一年草です。緑色の葉で養分を作りますが、根をほかの植物の根にからませて水や養分を横取りして生活しています。半寄生であるため栽培はできません。採らないで見守ってください。

## ○マルバノホロシ

晩秋、初神の三谷川に沿って奥へ入ってみましょう。えん堤を過ぎ、細い流れを渡って歩いていくと、左に大きなハゼノキが紅葉しています。左側に注意して進むと、透き通ったように見える『マルバノホロシ』の赤い実が目に入ります。球形の実が直径7～10mmで、長く伸びるつる性の多年草で、つるは無毛です。全体が有毒です。



▲マルバノホロシの実

「マルバ」といっても、葉は丸くはなく、長楕円形で、両端は次第に細くなっています。「マルバ」は葉が裂けていないという意味です。

「ホロシ」の語源は「保呂之の字などが当てられているものの由来は不明」とする説や、「赤い実が皮膚にできるホロシに似ている」とする説があります。

花は8～9月頃、淡紫色で深く5裂し、直径1cmほどです。裂片は開くとそり返ります。花の付く枝は、葉の反対側、または節と節の間の茎の途中から出ていて、まばらに花をつけます。

関東以西の山地に生え、県内でも割によく見られますが、町内では稀で、三谷川と海上川に少しあるだけです。

同じナス科ナス属の『ヒヨドリジョウゴ』は町内にも多く、赤い実はそっくりです。しかし、裂けた葉が混じっていて茎や葉に軟毛や腺毛が密生し目立つので、すぐ見分けられます。こちらも有毒です。

## ○マンネンタケ（万年茸）

硬くて腐りにくく長い年月、原形を保つため、漢字では『万年茸』と書きます。

中国では「靈芝（れいし）」と呼ばれ、不老長寿の伝説で有名です。吉兆の縁起物として珍重され、絵画や彫刻、文学作品にも数多く登場してきました。

現在でも滋養強壮など薬効が認められ、人工栽培で大量生産されて、漢方薬や健康食品に使われています。



▲マンネンタケ

抗がん剤の期待もあります。今年の中国新聞には、靈芝（れいし）の菌糸から抽出したエキスに大腸がんを予防する可能性がある、という記事が載っていました\*。

傘は半円形や腎臓形で、直径は5～20cm、長さ5～15cmの柄は、普通のキノコと違って、傘の端に付きます。表面は硬い殻に覆われ、ニス塗ったような光沢があります。

初夏から秋に、ウメやカエデ、クリなど広葉樹の根元に生え、木を腐らせる白色腐朽菌です。北半球の温帯に広く分布しています。

よく似て紛らわしい『マゴシヤクシ（孫杓子）』は、これより傘が小さく柄は細長くて暗色で、モミ、マツなどの針葉樹に生える日本の固有種です。

「コフキサルノコシカケ（粉吹猿腰掛）」は姿からサルノコシカケ科の仲間に見えますが、実はマンネンタケ科で、胞子に共通性があり薬効もあります。

マンネンタケ科のキノコは、世界に約100種、日本には十数種が知られています。

※この項目は2010年（平成22年）に作成したものです。

## 〇ムラサキシメジ

晩秋のキノコ、『ムラサキシメジ（紫占地）』です。私の記録では、いつも11月に見ています。

雑木林の落葉の積もった地面に生える落葉を分解する菌類です。しばしば輪を描くように並んで生え、それを菌輪といいます。菌輪の直径が大きい時は列のようにも見えます。



▲ムラサキシメジ

3年前※、新宮から黒瀬との境の山へ登った時、数十本の大群生に出会いました。皆しばらくの間、キノコ狩りに夢中になりました。

初めは全体に美しい紫色ですが、次第に色あせて白っぽくなり、最後には汚れた褐色を帯びます。中型のキノコで、傘の直径は5～10cmとなり、ヒダは写真のように、びっしりと密に付いています。茎は長さ4～8cmで、根元がふくらんでいて、繊維状の肉質でしっかりしています。

食用キノコで、口当たりが良く味も温和で、人気があります。汁物や酢の物などにしますが、時に多少土臭さを感じるものがあり、油を使った料理が合うようです。生で食べると中毒になるので注意しましょう。

似たキノコに、コムラサキシメジがあります。ムラサキシメジより小型で肉が薄く、ヒダは密ではありません。発生時期は夏から秋と早く、畑や芝生、道端などと場所も違います。こちらも食用で、味はムラサキシメジより上質です。

※この項目は2007年（平成19年）に作成したものです。

## ○ヤクシソウ

よく枝を分けて茂り、枝先や葉の腋に多数の花をつけ目立ちます。写真のような姿で咲く黄色い花で、町内では10～11月頃に見られます。

漢字では『薬師草』と書き、その語源は、「葉の形が薬師如来の光背に似るとい説」や、「かつて薬草として使われたことによるとい説」がありますが、不明説もあります。



林縁や林道の端など、日当たりの良い所に生えます。新しく道をつけた斜面などの裸地に真っ先に侵入するパイオニア植物で、一面群生していることがあります。

普通二年草で、1年目は地面に紫褐色を帯びたさじ形の根生葉を広げ、2年目に花を咲かせ種を作り枯れてしまいます。

日本全土に分布し、高さは30～70cm、全体無毛の植物です。

葉は互生し、薄くて鋸歯があり基部は茎を抱きます。葉が羽状に裂けた型があるものは『ハナヤクシソウ』と呼びます。

ところで、この写真にはいくつの花があるように見えますか。10個ほどと思われるかもしれませんが、実は100個以上あるのです。

キク科は一つの花に見えるものが小さな花の集合体で、頭花と呼びます。ヤクシソウの頭花の直径は1.5cmほどです。

ヤクシソウやタンポポなど、舌状花だけで筒状花のないキク科はどれも、葉を切ると白い乳液が出ます。キク科の中のタンポポ亜科の仲間の特徴です。

## ○ヤマジノホトトギス（山路の杜鵑草）

「杜鵑草（ホトトギス）」の名は、花が白地で紫色の斑紋があり、鳥のホトトギスの胸の模様に似ているため付いたとの説が有力です。しかし、この仲間には黄花の種類も日本に8種ほどあります。

『ヤマジノホトトギス』は日本の特産で、北海道から九州まで広く分布し山の適度な湿り気のある所に生えています。



▲ヤマジノホトトギスの花

県内の花期は7～9月、熊野では8～9月です。花は葉の腋に1～3個ずつ、上を向いて咲き、直径2.5cmほどです。花びらが水平に開くのが特徴の一つです。

外側の3枚の花びらは下部がふくらんでいて、蜜がたまっています。花の中央の紫色の大きな斑紋は、この奥に蜜があるよと虫に知らせる蜜標です。花を訪れたマルハナバチなどの背に上の雄しべ雌しべが触れて、受粉させる仕組みになっているのです。

茎は長さ30～60cm、斜め下を向いた毛があります。葉は互生し、無柄で茎を抱くように付いています。

よく植えられているホトトギスは、茎の毛が上向きで葉の両面が多毛です。『ヤマホトトギス』は、茎の先に花柄が枝を分けて数個の花をつけ、花びらが下にそり返ります。『セトウチホトトギス』は、花が水平に開きますが蜜標が黄色です。これらは、県内には分布しないか稀な種類のように、私はまだ見たことがありません。

## ○リンドウ（竜胆）

清少納言の「枕草子」に「こと花どものみな霜枯れたるに、いとはやかなる色合ひにてさし出でたる、いとをかし」とある『リンドウ（竜胆）』は、味わい深い晩秋の花です。長野県、熊本県では県花になっています。

町内では10月中旬～12月初旬に咲きます。



▲リンドウの花

花は日光を受けて開き、雨の日や夜は閉じています。この様子は、リンドウ属の多くの種類で見られます。虫が来ない、受粉に効率の悪い時は花を閉じるのです。上を向いて咲く鐘型の花に雨が降り、花が傷むのを防ぐ働きもあるのでしょうか。

薬用として、根や根茎を乾燥し、煎じたり粉末にしたりして服用します。苦味成分のゲンチアニンが舌を刺激することで胃液の分泌が盛んになり、健胃薬として知られています。漢方で、古くから消炎剤として用いられてきました。

この生薬が、熊の胆よりも苦いとして中国名『竜胆』の名があります。万葉集にはなく、古今集では「りうたむ」と記載があり、やがて「りんどう」に転訛したとされています。

本州、四国、九州に分布し県内に広く生育する多年草で、高さ20～60cm、葉は対生で笹の葉に似ています。

蕾や閉じた花は、筆の穂先のような形です。春に咲く小さな『フデリンドウ』もあります。

筆の里で見られるリンドウ属の花。どちらも多くはありません。見守ってくださいね。

## ○キイロスズメ

ジェット機のような姿、いかにも速く飛びそうですね。

実際スズメガの仲間は、大型で前翅が細長く、飛翔力の強いものが多く、鳥のように渡りをするものもいます。採集家の間では、ガの貴族として扱われています。

5月から10月に、2回成虫が発生します。

翅を開いた長さは80～105mmにもなるとされ、写真のガは体長が54mmありました。腹部の両へりが鮮やかな黄色なのが特徴です。



▲上から見たキイロスズメ

夕方から夜に活動し、オシロイバナやオイランソウの花に、5cmほどもある長い管状の口を差し入れ、羽ばたきながら空中に停止して蜜を吸います。

この様子を見た人はハチドリと間違えたりします。私も子どもの頃、クチナシの蜜を吸うオオスカシバをハチドリかと思ったことがあります。

口の長さは花の筒部の長さに関係があり、スズメガの種類と訪れる花はだいたい決まっています。

メスは飛びながら、ヤマノイモ、オニドコロなどの葉に1個ずつ産卵します。産卵する食草をさがすのは、においをかぎ分ける鋭い感覚をもつ触角の力です。

幼虫には、尾端に1個黄色の角状突起があります。地上で粗末な繭（まゆ）を作り蛹（さなぎ）になります。越冬するものは土の中で繭を作ります。

北海道を除く日本全土、また、ビルマやインドなど、広く分布しています。

## ○クスサン

翅を開くと長さ10～13cmほどになり、年1回、9～10月頃に羽化します。

翅の色は灰黄色から濃赤褐色までさまざまです。前翅を開くと、後翅の黒い大きな眼状紋が現われ敵を脅します。



▲上から見たクスサン（オス）

写真はオスです。触角が羽のようで幅広いことで分かります。

メスはオスを引き寄せるフェロモンを分泌し、オスは遠く離れていても触角でフェロモンをキャッチして近付きます。メスは、幼虫の食樹となる木の幹などに多数の卵を1か所に産みつけます。

卵で越冬し、4月頃に孵化（ふか）します。始めは小さな黒い毛虫で、集団で生活します。大きくなると体長7～8cmになり、背は青白色で白い長毛があるため、『シラガタロウ』と呼ばれます。横から見ると青い紋が並んでいます。非常に多種類の木の葉を食べますが、特にクリをよく食べるのでクリケムシとも言います。

7月頃、枝先に繭（まゆ）を作ります。繭は長さ5cmほどの俵型で、堅く粗い網目状で、中の蛹（さなぎ）が透けて見えるので『スカシダワラ』の名があります。冬には、空になった褐色の繭がよく目に留まります。

ヤママユガ科の仲間は、翅の大きな種類です。体の大きな割に短命で、成虫は口が退化していて食物をとることもなく、羽化して交尾し産卵すると死んでしまいます。成虫の仕事は、子孫を残すことなのです。

## ○セスジスズメ

写真は、体長5～6cmの成熟した幼虫です。円い紋と白っぽい筋があります。この後土にもぐり、最後の脱皮をして蛹（さなぎ）になります。

蛹の体内では、幼虫の時に蓄えた養分で成虫としての体の器官が作られます。

蛹で越冬し、5～6月頃に羽化して成虫のガになります。夕方から夜に活動します。



▲セスジスズメの幼虫

メスは交尾後、飛びながら幼虫が食べる草に卵を1個ずつ産みつけます。

1週間ほどで黄緑色の小さな幼虫が卵から出てきます。幼虫には尾角という1本の突起があり、脱皮を繰り返して育ちます。若い幼虫は黒い地に黄色や橙色の円い紋が1列に並んでいます。

幼虫はサトイモ科のサトイモ、ブドウ科のツタやヤブガラシ、アカバナ科のマツヨイグサの仲間、ツリフネソウ科のホウセンカなどの葉を食べます。

成熟すると蛹を経て、7～8月頃に羽化し、産卵します。このようなサイクルで年に2回、成虫が発生します。

日本各地に普通に見られる中型のスズメガで、翅を開くと55～70mmあり、褐色で、前翅に幅広のはっきりした黒い帯があり、並んで白い帯があります。体は太い流線型で、背の中央に2本の細くて白い筋があります。

『コスズメ』がよく似ていますが、前翅の太い黒帯や体の背に明瞭な白い筋がありません。

## ○メンガタスズメ

「あっ、メンガタスズメ！」

町民会館でこのガを見つけた時、お面を背につけた特徴的な模様に覚えがありました。

属名「アケロンチア」は、ギリシャ神話の地獄の河の名にちなんだもので、面形をどくろに見たようです。ヨーロッパでは、この属のガの眼を見ると不幸が来るといふ迷信があるそうです。



▲メンガタスズメ

黒っぽい地味な前翅は、保護色で隠れるのに向いています。しかし、後翅は黄色で黒い帯が2本あり、太い胴も黄色と黒の縞模様でとても目立ちます。これは、危険が及んだ時に、敵を驚かす役目をすると思われます。翅を開くと10cm前後になります。

幼虫は、ナスやジャガイモなどの葉を食べ、大きくなると体長10cmになります。

5～10月に発生し、本州以南に分布しています。

スズメガの仲間は、日本に約70種いるとされ、その多くは、翅が細長い三角形で、胴は太く、飛ぶ力が強く、渡りをするものもいます。

幼虫はイモ虫で、尾端に1本の角があるのが特徴です。ほとんどの種が、地上や地中で蛹（さなぎ）になり越冬します。

子どもの頃、畑を耕すと蛹がよく出てきました。摘むと褐色の体の先をキュッキュッと動かします。「西向け東向け」だと教えてもらいました。

町内では、『キイロスズメ』や『セスジスズメ』、『オオスカシバ』など、これと同じスズメガの仲間を数種類を見えています。



## 【冬】

### 植物

○アカマツ	88
○アラカシ	89
○イヌツゲ	90
○ウラジロ	91
○ウラジロノキ	92
○ウリハダカエデ	93
○カクレミノ	94
○カゴノキ	95
○カラタチバナ	96
○クロモジ	97
○コシアブラ	98
○コナラ	99
○ザイフリボク	100
○タカノツメ	101
○タマキクラゲ	102
○ツチグリ	103
○ツバキキンカクチャワンタケ	104
○ツルグミ	105
○ハタザオ	106
○ハハコグサ	107
○フユイチゴ	108
○マンリョウ	109
○ミヤコイバラ	110
○ヤブムラサキ	111
○ヤマウルシ	112
○ヤマハゼ	113

### 昆虫

○ウスタビガ	114
○フクラスズメ	115

### 鳥

○ウグイス	116
-------	-----

## ○アカマツ（赤松）

お正月、門松などに松は欠かせません。濃い緑色の葉や勢いの

熊野町に人々が住み始めた氷期には、ブナやミズナラなどの落シイやタブノキなどの常緑広葉樹林となり、森林を開墾し農耕地などの二次林へ移行したと考えられています。日当たりを好み、してくる先駆樹です。



▲アカマツ

『アカマツ』は日本で一番多い木です。中でも広島県は全国で最もアカマツ林の面積が広く、町の山林では約80%を占めています。

『アカマツ（赤松）』は、その名の通り、樹皮や冬芽が赤褐色です。

主に海岸に生え剛壮な黒松に比べ、葉がやや細くて軟らかく、県内では広く『オナゴマツ』と呼ばれています。

4～5月には、枝先に園芸上「みどり」と呼ばれる長枝が伸びます。その下部に黄褐色の雄花が多数つき、先端に紅紫色の雌花が2～3個つきます。長枝にはごく短い短枝がつき、葉が2本ずつ付いています。

松ぼっくりは、1年目は小さく、翌年の秋に成熟します。雨の日には閉じ、乾燥した日に開いて種を飛ばします。種には薄い翼があり風に乗って運ばれます。着地した所が湿っていると、翼は種からはずれません。

## ○アラカシ（粗櫨）

ころころと愛らしいドングリは、昔は動物だけでなく、人にとっても重要な食料でした。アラカシなど渋みのあるものは、水にさらしたり煮沸したりして渋抜きをして食べました。

堅果は晩秋に熟して落ちます。長さは1.5～2cmで、殻斗と呼ばれるお椀のような部分は数段の輪状です。

材は堅くて丈夫で、町内をはじめ広く「堅木（カタギ）」の名があります。「櫨（カシ）」の字は「堅」と「木」を合わせて作られた和字です。

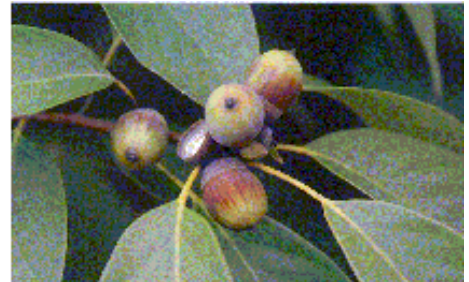
材はつるはしや鍬の柄などの農具、金槌の柄や鉋などの工具、木刀、三味線の柄、建築材、また薪炭材、生垣などにも利用されます。

葉は互生で柄があり、上半部にだけ鋭い鋸歯が出ます。裏は灰白色で伏した毛があります。『アラカシ（粗櫨）』の名は、葉が粗大なことから付いたと言われます。

4～5月、多数の鱗片に守られていた冬芽がいっせいに動き出します。短期間に枝を伸ばし、葉を開くと同時に花を咲かせます。蓄えていたエネルギーを一気に放出する様子に圧倒されます。

雌雄同株で、雄花の穂は長さ5～10cmで垂れ下がります。雌花は小さく枝先の葉腋に2～3個つきます。

高さ10～20mの常緑樹で、宮城県・石川県以西に分布し、県内では標高700m以下に広く生育します。町内で最も多く見られるカシの仲間です。



▲アラカシの堅果（ドングリ）

## ○イヌツゲ（犬黄楊）

子どもの頃、庭に植えられていた木の名前を尋ねると、父は「ネズミモチ」だと教えてくれました。町外では、呉市や庄原市などでも、この名で呼ばれます。

名は、樹皮を叩き、粘りを出してネズミを捕らえたことから付いたと言われます。烏糲（とりもち）としても使いました。

「ヨメノサラ」と呼ぶ地方もあります。長さ1.5～3cmの小さな葉を、お嫁さんが使う皿に見立てた名です。



▲イヌツゲの実

常緑で高さ2～3m、最大7m、直径15cmにもなります。町内で直径10cm以上の大きな木が群生しているのは、竜王山の山頂あたりです。

よく枝を分けて小さな葉を密につけ強い刈り込みにも耐えるので、庭木、生け垣、盆栽、また鳥や動物などの姿に刈り込んで作るトピアリーにも使います。

葉は互生しますし、光沢があり滑らかで、低く目立たない鋸歯があります。

6月頃、葉の腋に直径4mmほどの白い花が咲きます。雌雄異株で、雄花は数個ずつ、雌花は1個ずつ付きます。

果実は直径5～6mmの球形で10～11月に黒熟します。

本州、四国、九州に分布し、町内で普通に見られます。

多くの園芸品種があり、マメツゲは葉が強くそり返り丸く膨らんで見えます。

和名『犬黄楊』は、ツゲに似るが材質が劣るため付いた名です。ツゲはツゲ科で、葉は対生しています。

## ○ウラジロ（裏白）

お正月のしめ飾りや重ね餅などに欠かせない『ウラジロ』は、葉の裏が目立って白いのでその名が付いています。裏に白い星状毛が密生しているためですが、やがて落ちてしまい古い葉では白くありません。

葉がしだれるので、古くから「シダ」と言えば普通『ウラジロ』を指し、町内でも「シダ」と呼んでいました。



▲ウラジロの葉

常緑で高さ50～200cmの大型で多年生のシダで、種ではなく孢子で繁殖します。

福島県、新潟県以南の暖地に分布。山のやや乾いた所に生え、根茎が長く地中をはって広がり大きな群落になります。

長く硬い葉柄は茶褐色で艶があります。編んで盆やかごなど細工物に用いました。

ところで、なぜウラジロがお正月の飾りに使われるのか知っていますか。いくつかの説があるようです。

ウラジロは、葉柄の先に翼のように2枚の葉を広げています。その分岐点に芽があり、翌年の初夏ここから柄を伸ばし、また2枚の葉を広げます。このように代を重ねて伸びるので、代々子孫が続くことを願って飾るという説があります。

また、「諸葉（モロバ）」「諸向（モロムキ）」と呼ぶ地方がありますが、これは、2枚の葉を同じ向きに広げている形を夫婦和合に見立てたという説があるためです。

ほかにも、江戸時代に「ホナガ」の名があり、長い稲穂に見立て、稲のシンボルとして飾ったという説などがあります。

## ○ウラジロノキ（裏白の木）

その葉の裏が白いため、『ウラジロノキ（裏白の木）』と呼ばれます。

白い綿毛がびっしりと密生した葉の裏は、落葉になってもそのまま、ひときわ目立ちます。乾燥すると、裏を外側にして巻きます。写真は10月下旬の撮影したのですが、冬でも同じ状態です。葉は幅広の楕円形で、長さは6～13cmほどで浅く裂け、粗いざざざがあります。



▲ウラジロの実

樹皮も特徴的です。灰褐色で、菱形の裂け目が点在し、縦に裂けます。老木では鱗状にはがれてきます。

秋には、熟した実が地面に落ちていました。長さ1cmほどの楕円形で、紅色や橙黄色をしており、点々と白い皮目が付いています。果肉は橙黄色。食べてみると、じゅりじゅりしていて食用には向きません。これは、細胞壁が硬くなったせき石細胞があるためです。野鳥にとっては大切な食料です。

花は、町内では5月頃に見られ、白色で直径は1～1.5cm、花びらは5枚で、短枝の先に集まって咲きます。

落葉高木で、高さ10～20m。葉は互生し、短枝では集まって付いています。

日本の固有種で、本州、四国、九州の山地から亜高山帯に分布します。県内全体に広く生育し、町内でもよく見かけます。

よく似ている『アズキナシ』は、葉がほとんど無毛で、実は一回り小さく、町内ではあまり見られません。

## ○ウリハダカエデ（瓜肌楓、瓜膚楓）

冬には、冬ならではの魅力的な表情があります。枝先の冬芽は柄があり、紅紫色の大きな長卵形で無毛。凜とした美しい冬芽です。

「瓜肌楓」または「瓜膚楓」と書きます。

樹皮が緑色で黒っぽい縦縞模様があり、マクワウリに似ているので付いた名です。樹皮に菱形の裂け目ができます。

葉は幅広で大きく、浅く3～5に裂けています。カエデの名は、葉の形が蛙の手のようにして「蛙手」がカエデになったと言われますが、葉の形はさまざまです。大切な特徴は、枝や葉などが向き合って付くことです。

もう一つの特徴は、翼のある2個の実がプロペラの形に付くことです。その角度は種類によって違い、『ウリハダカエデ』はほぼ直角につきます。

高さ10m前後になる落葉高木で、日本の固有種で、本州、四国、九州に分布します。県内にも広く生育し、町内の山でも全域で見ることができます。城山や金ヶ燈籠山の屋根には大木や群生があり、赤や黄色に見事に紅葉します。

雌雄異株で、5月頃、葉が出るのと同時に、かんざしを垂らしたように淡緑色の花が集まって咲きます。

材は白く箸の材料とし、宮島や大野町、比和町などでは「シラハシ」の名で呼ばれます。

『ウリカエデ』は、樹皮や冬芽は似ていますが、葉が小さく枝も細くて大木にはなりません。



▲ウリハダカエデの冬芽

## ○カクレミノ（隠れ蓑）

『カクレミノ（隠れ蓑）』の名は、着ると姿を隠すことができるという天狗の蓑に、葉の形が似ているので付きました。

若木では普通、葉の先が3つに裂けます。幼木では深く5裂する葉もあります。成木になると、ほとんどの葉が裂けなくて、写真のような広卵形になります。

葉は枝先に集まって互生し、厚く無毛で光沢があります。表は濃緑色、裏は淡緑色で、長い柄があります。葉の寿命は、およそ1年半で、晩秋、古い葉は美しく黄葉して落ちます。耐火力の強い常緑広葉樹です。

花は7～9月頃に、淡黄緑色の小さな花が枝先に半球状に集まって咲きます。花の集まりを花序（かじょ）と言い、枝先に1～4個の花序をつけます。中心の花序が咲いて若い果実になってから脇の花序が咲くので、花は長く見ることができます。

果実は、11～12月頃に黒紫色に熟し、長さは約8mmで果序は垂れ下がります。

幹は直立し、高さは5～10m、時に15mに達します。樹皮は灰白色、若枝は緑色で、全体に無毛です。

樹液は黄漆と呼び、透明で光沢が美しく、家具や刀の柄などの塗料に用いられました。日陰でも生育し、庭木や鉢植えに使われます。

関東地方より西の暖地に分布し、県内では島や沿岸部に多く、町内ではほぼ全域の山で見られます。



▲カクレミノの実と葉（成木）

## ○カゴノキ（鹿子の木）

一番の特徴は、鹿の子のような斑模様の樹皮で、「カゴノキ（鹿子の木）」の名は、ここから付きました。

樹皮は淡灰黒色から茶褐色で、幹が太くなるとジグソーパズルのような形にはがれていきます。

町内の山に広く生育していますが、多くはなく、幼木や若木ばかりです。町内の山で鹿の子斑になったカゴノキが見られるのは、道上奥の石岳山登山口から山に入り、しばらく歩いた左側で道から2mほどの場所にありません。町内ではほかにも、城之掘五丁目の大元神社でも見ることができます。

呉市の灰ヶ峰にはカゴノキが群生していて、車道沿いでたくさん観察できます。

関東地方以西の暖地に分布する常緑高木で、高さ15m、直径30cm、大きなものでは80cm以上にもなります。

花は9月頃、葉のわきに集まって咲き、淡黄色をしています。雌雄異株で、雄花では雄しべが伸び出てやや目立ちますが、雌花はよく見ないと気が付かないほど地味です。

しかし、雌株では、翌年の7～8月頃に、長さ8mmほどの楕円形の赤い実が熟し、緑の葉の中で輝きます。柄は太く短かめです。

葉は枝先に集まってつき互生し、長さ5～10cmで、縁はなめらかです。先は短く突き出しますが尖ってはいません。裏は白っぽくて清潔感があり、ぱしっとした硬さの魅力的な葉です。



▲カゴノキの幹

## ○カラタチバナ（唐橘）

常緑の濃い緑色の葉と長く残る赤く美しい実が古くから愛され、「センリョウ（千両）」、「マンリョウ（万両）」、「ヤブコウジ（藪柑子）」（十両）とともに、お正月の花材や鉢植えなどによく用いられます。『カラタチバナ（唐橘）』は俗に「百両」と呼ばれ、江戸時代に多くの園芸品種が作られ、明治時代には100品種もあったと言われます。

この中で、「センリョウ（千両）」だけはセンリョウ科で縁の遠い植物ですが、ほかにはヤブコウジ科ヤブコウジ属の仲間、3とも町内で見ることができます。



▲カラタチバナの葉と実

花は7月頃、茎から3～7cmほどの柄を伸ばし、先に数個から10個ほどの花をつけます。白色で直径7～8mm、5つに深く裂け、裂片はそり返ります。

実は直径6～7mm球形で、10月後半頃から赤く熟し翌春まで残ります。1個の大きな種が入っています。

茎は1本直立し、高さは20～40cmですが、大きなものは1m近くになります。マンリョウと違って、枝を出さないのが特徴です。

葉は互生し、マンリョウより細長く、縁の波打つような鋸歯も細かくて目立ちません。縁に腺点があります。

関東地方より西の暖地の林内に分布していますが、マンリョウより珍しく、個体数の少ない植物です。

町内では萩原地区、石岳山や土岐城山などで見られますが、持ち帰らず、大切に見守っていただくようお願いします。

## ○クロモジ（黒文字）

熊野の山も冬を迎えました。

葉を落とした低木の枝先に、かわいい冬芽を見付けました。中央の紡錘形をしたのが葉芽、丸くて先が少し尖っているのが花芽です。花芽の柄に毛があるのが『クロモジ』の特徴で、町内の近縁種と区別できます。

枝を折るといい香りがします。精油を含んでいるからです。香水の原料にします。和菓子に添えられている上等の楊枝は、皮つきのまま削って作られ、『クロモジ（黒文字）』と呼ばれます。緑色をした枝の黒い斑紋を文字に見立てたのが、名の由来です。

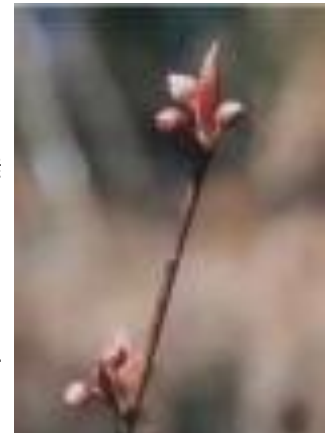
油分を含んでいるため、生木でも燃えやすく、焚き付けに使い、県北では、「アブラギ」の名があります。子どもの頃冬の山仕事で、薪を束ねるのに父が『クロモジ』を使っていたのを覚えています。

花は町内では4月頃に咲きます。葉が開くよりやや早く咲き始め、一つの花芽から10個ほどの淡い黄緑色の小さな花が咲きこぼれます。花には柄があります。雌雄異株で、雄花は雌花より大きめで華やかです。

葉は互生し枝先に集まってつき、初め白い長毛があります。柄があり、長めの楕円形で縁はなめらかです。

実は直径5mmほどの球形です。秋には鮮やかに黄葉した葉の中に、艶やかな黒い実が集まって印象的です。

町内で普通に見られます。



▲クロモジの実

## ○コシアブラ（漉し油）

樹液を漉して、鉄の錆止めに使う油を採ったので、『コシアブラ（漉し油）』の名が付きました。この油を金漆と呼び、「ゴンゼツノキ」の別名があります。黄色い樹液を見えています。

白色の材は、軽くて軟らかく加工しやすいので、箱、下駄、細工物などに使われます。材を紙のように薄く削り、経文を写す経木にしたので、「キョウギノキ」の名もあります。経木で編む帽子も作られていました。

若芽の天プラや和え物などは、コクがあり美味しいと人気があります。

花は8～9月、枝先に黄緑色の小さな花が多数集まって咲きます。

果実は、やや扁平な球形で、直径4～5mmほどになり、10～11月に黒紫色に熟します。

葉は互生ですが、普通短枝の先に輪生状に出ています。8～30cmもある長い柄の先に、手のひらを広げたように5枚の小葉がつきます。トチノキに似ていますが、小葉にも柄があるのが特徴です。縁に刺状の鋸歯があります。晩秋、透き通るような美しい黄葉を見せます。

落葉高木で、高さ10～20m、直径は最大60cmに達し、樹皮は灰白色で滑らかで、太い幹の根元などには数本のしわ状の横線ができ、まるで象の脚のようです。

北海道から九州に分布し、県内にも広く生育しますが、島には見られません。町内の山ほぼ全域に分布します。



▲コシアブラ

## ○コナラ（小櫛）

写真は、雑木林を代表する『コナラ（小櫛）』の落葉です。

葉の表は褐色で、裏は白いのが特徴です。

4～5月、芽吹きと同時に咲きます。雄花はひも状に垂れ下がり風で花粉を飛ばします。雌花は葉の付け根に2～3個付いています。

ドングリは細長い楕円形で、長さ1.5～2cmほどで、お皿のような殻斗（かくと）は鱗状です。秋に熟し、地面に落ちます。その後、いっせいに葉を落とし、ドングリを覆って乾燥から守ります。水分があることで、ドングリは長い根を伸ばし、春の発芽を待ちます。



▲地面に落ちたコナラの葉

ドングリは多量のデンプンを含んでいて、渋抜きをすると食べられます。かつては飢饉の時の食糧として貯蔵されていました。

多くの野鳥や動物の貴重な食物です。ヤマガラは土に埋めこんで蓄える習性があり、忘れられたものは発芽します。動物のそうした働きで分布を広げるのです。

高さ15mほどにもなり、樹皮は灰白色で、浅く縦に裂けます。葉は鋸歯があり互生します。1～2cmの葉柄があります。

切られても切り株から芽を出し育ちます。この萌芽（ほうが）更新をくり返し、雑木林を維持しました。

火力があり、薪、木炭の原料に使いました。現在は主にシイタケの櫛（ほだ）木に利用していません。建築、家具、器具材にも用います。

ほぼ日本全土に分布し、町内の山でも多く見られます。

## ○ザイフリボク

寒い冬も、山はやっぱり楽しいのです。

葉を落とした木々の美しい姿、葉が落ちて枝に残る葉痕（ようこん）、春を待つ冬芽…。

最も好きな冬芽の一つが、『ザイフリボク』です。艶のある紅い芽鱗で、しばしば少し開き白い毛がのぞいています。この小さな冬芽から、春には10個ほどの花と葉が現れるのです。



▲ザイフリボクの実

町内では、花は4月中旬から下旬頃、直径約3cm、細長く白い5枚花びらを持つ花を咲かせます。

この花を、昔武将が兵を率いるのに用いた「采配（さいはい）」に見立て『ザイフリボク（采振木）』の名が付けました。また、神棚やしめ縄につける「四手」に似ているとして『シテザクラ（四手桜）』の別名もあります。

葉は互生し、長い柄があり、先が尖った楕円形で細かい鋸歯があります。若葉の裏は白い軟毛が密生し、花期には木全体が白っぽくみえます。

実は秋に熟し、黒紫色で直径6～10mmなどとなり、宮島のサルも好物だそうです。

県内では、方言で、材が硬く薪を作るのが大変なので「ジジイナカセ」、杵に利用したので「モチギ」、実が煮豆に似ているとして「ニマメ」など多数の呼び名があります。

岩手県以南に分布する落葉高木で、高さ5～10mほどにもなり、町内では大きいもので直径約15cmですが、最大では直径50cmにもなるそうです。

## ○タカノツメ

冬は落葉樹の冬芽や葉痕などを観察して楽しんでいます。

葉が落ちると、枝に痕跡が残ります。それが葉痕です。この写真では、細い三日月状の部分が葉痕です。葉痕の中に点々とあるのは維管束痕で、維管束は水や養分の通り道です。

同じウコギ科のコシアブラとは冬芽や葉痕がそっくりですが、維管束痕は、コシアブラが11～16個と多く、タカノツメは5～9個と少ないため、区別できます。

枝先に葉が束生し、毎年少しずつ伸びる短枝があるのが特徴の一つです。短枝は曲がり、何年もの葉痕が並んで「鷹の爪」に似ているので、その名が付けました。

材が芋のように軟らかいため、別名「イモノキ」とも呼ばれます。白い材は箱、杓子、経木、箸などに利用されてきました。

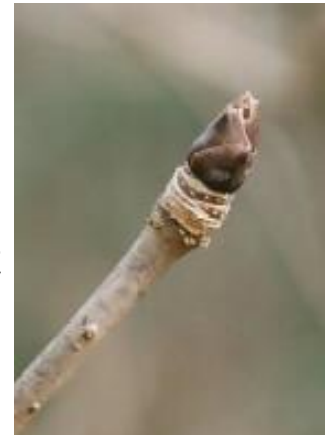
葉は長い柄のある3枚葉で、縁には微細な鋸歯があり、葉先は鋭く尖ります。晩秋には美しく黄葉します。

雌雄異株で5～6月、短枝の先に黄緑色の小さな花が丸く集まって咲きます。果実は直径5mmほどの球形で、秋に黒く熟します。

高さ5～15mの落葉樹で、樹皮は灰白色で滑らかです。

日本特産で九州以北に分布し、町内ではほぼ全域で見られ、土岐城山、竜王山などには多く生えています。

タカノツメ属は、もう1種が中国にあるだけです。



▲タカノツメの冬芽

## ○タマキクラゲ

ほぼ球形のククラゲ類なので、『タマキクラゲ』と呼ばれます。

さっと茹でて、わさび醤油やサラダにして食べました。酢の物もいいそうです。味は淡白ですが、ぷりぷりして歯触りも良く、お勧めのキノコです。



▲群生するタマキクラゲ

分かりやすく、似た毒キノコもなく、よく見かけるキノコです。ゼラチン質のククラゲ類の仲間では有毒なものは、今までのところ見つかっていないようです。

コナラなど、ブナ科の落葉樹の枯木に発生します。ゼラチン質で、直径は1～2cmほどの大きさで、半透明の飴色で扁平な球形を多く見ますが、色や形は変異があります。群生して発生し、くっついていても融合することはなく、1個ずつ分かれているのが特徴です。

春から秋に発生と言われますが、私の記録では2～4月がほとんどです。

日本と韓国に分布します。

ククラゲ類の名は、木に生え、海のクラゲに似ているところから付きました。『ククラゲ』や『アラゲククラゲ』、『シロククラゲ』など、中華料理の材料として有名なキノコが含まれています。

多くの種類が、通常ゼラチンやゼリーのようになめらかなので、英語ではゼリー菌類という意味の名で呼ばれています。

乾燥すると収縮して、膠や軟骨のように硬くなるので、膠質菌類とも呼びます。

## ○ツチグリ（土栗）

山を歩いていると、道のそばの崖下などでよく見かけます。『ツチグリ（土栗）』と呼ばれるキノコです。

星形に開いた6～10個の裂片が湿度によって開いたり閉じたりするので“キノコの湿度計”とも言われます。

裂片の内側の層が水分を含むと膨張するため、そり返るように開くのです。乾燥すると元に戻り、中央の球形の内皮を包むように閉じます。すると上の小さな孔から胞子が放出されます。

成熟前の幼菌は、やや平たい球形で、直径2cm前後と、外皮は白くて裂けていません。内部も白色です。

成熟前の幼菌は食べることができます。スライスして汁物や炒め物にすると歯切れも良く美味しいようですが、幼菌は地中にあるため目に触れず、まだ食べてみたことはありません。

成菌の外皮は灰褐色から黒褐色で、外皮の内側は白色、ひび割れて写真のような網目模様です。夏から秋に発生しますが、革質で腐りにくく、冬から春にかけても見られます。

マツタケやシイタケなどは傘の裏のひだの表面で胞子が成熟しますが、ツチグリのように胞子が成熟するまでキノコの内部（腹の中）に保護されている仲間を腹菌類と言います。幼菌は球形や卵形などですが、成菌の姿形はさまざまです。

町内では、カゴタケやスッポンタケなど15種以上を見えています。



▲ツチグリ（成菌）

## ○ツバキキンカクチャワンタケ

写真は、初神の大迫山中腹にあるヤブツバキの群生地でも撮影しました。ほぼ実物と同じ大きさです。

初めて見たのは、呉地の庭でした。図鑑に、長年ツバキの植わっている所で花の頃に見られると書いてあり、もしかしたらとヤブツバキの根元を探したら、あったのです。



▲ツバキキンカクチャワンタケ

菌核菌（キンカクキン）の菌核とは、遊離した塊状の菌組織です。地面に落ちたツバキの古い花や葉に付着して、キノコを発生します。キノコには長い柄があります。

傘のような部分の子囊盤（しのうばん）といいます。子囊盤は黄土色から褐色で、直径3～18mmほどになります。成熟した子囊盤からは、胞子が噴出するのが観察されるそうです。胞子は落ちた花に付いて菌子を出し、花の組織を分解して育ち、晩秋に菌核となります。

同じ仲間によく似たものがあります。地面に落ちたハンノキの雄花穂から発生する「キボリア・アメンタケア」や、モミやトウヒなどの果鱗から発生する「マツカサチャワンタケ」、ミズナラのドングリから発生する「ドングリキンカクキン」などです。これらは、私もまだ見ていないのでぜひ探してみたいと思っています。

子囊菌類は、子囊と呼ばれる袋状の器官の内部で胞子が作られる菌類です。

冬虫夏草<sup>注8</sup>と呼ばれる仲間やアミガサタケの仲間などもこの子囊菌類に入ります。

## ○ツルグミ

グミはグイミの略で、グイとは刺のことです。

グミの仲間の多くは枝に刺があり実が目立つので「グイミ」の名が付いたようです。熊野町では「グイビ」と呼びます。

『ツルグミ』は、枝がツル状に長く伸び、ほかの木にからんで生育します。常緑ツル性、葉の裏は赤褐色でやや光沢があり、ほかのグミの仲間から見分けられます。



▲ツルグミの花

グミの仲間は、鱗状毛があるのが特徴です。ツルグミの若枝や葉の裏、葉柄などが赤褐色をしているのは、赤褐色の鱗状毛が密生しているからです。10倍のルーペでのぞいてみましょう。

花は晩秋から初冬に咲き、すーっとした芳香があります。花びらはありません。がくが筒状で大きく、先は4つに裂けて花びらのようです。

果実は翌年の5月頃赤く熟し、渋みがありますが食べられます。がくの筒部が肥大して肉質になったもので、植物学では、「偽果」と呼びます。縦に溝のある大きな種子が1個入っています。

常緑のグミでは、ツルグミ、ナワシログミ、ウラギンツルグミが町内で見られます。ナワシログミの葉は、なめし皮のようで厚く縁は波うち、裏は汚白色で光沢はありません。ウラギンツルグミはツルグミとナワシログミの雑種とされ、表はツルグミのようですが、裏が銀白色です。

## ○ハタザオ（旗竿）

根元から出た葉が地面に張り付くように円く広がったものを「ロゼット」と呼びます。

バラ、ローズと同じ語源で、バラの花のような形を意味しています。ロゼットの多くは、キク科やアブラナ科などの草の冬越しの姿として見られます。

冬の乾燥した寒風を避け地熱を利用し、日光をしっかりと受けて養分を蓄えます。



▲ハタザオの葉

葉の形や色、厚み、毛などの特徴を観察すると、ロゼットでも種類が分かります。ハタザオの根出葉は、羽状に中裂しています。先の方は幅が広くて尖らず、両面に星状毛などの毛が密生していて、白っぽい緑色です。

春になると、一本だけ真っ直ぐに茎を伸ばします。高さは50～100cmになります。

茎に付く葉は、根出葉とは違って無毛で裂けず、茎を抱くようにつき、上方ほど小さくなります。中部より上は全体無毛です。

4～6月、茎の先に黄色を帯びた白色の小さな十字状花が総状に咲きます。

実は細く、長さ4～6cmもありますが、上向きに茎にぴったりと沿っています。このような草の姿から、『ハタザオ（旗竿）』の名が付けました。

発芽し、ロゼットで冬を越し、春に開花し実をつけて枯れる二年草です。

日本全土の日当たりの良い草原、河原などに分布します。町内では、新宮の熊野川の土手で見られます。

## ○ハハコグサ（母子草）

春の七草の一つ「ゴギョウ（御形）」が、この『ハハコグサ』です。

中国で、無病息災を願って旧暦の正月七日に「七草粥」を食べる風習があり、平安時代に日本に伝わりました。平安時代の七草の種類は不明ですが、鎌倉時代には現在の七草があげられています。江戸時代には、年中行事として定着しました。

「御形」とは、昔、子どもが無事育つことを祈って白絹で作った母子の人形です。それに、この草を入れた餅を「母子餅」と呼び供えたので『ハハコグサ（母子草）』の名が付いたとも言われますが、他説もあります。

ほかにも、「ホオコグサ」が「ハハコグサ」に転訛し、「母子草」の字を宛てたという説もあります。ホオコグサについても、花が結実し、蓬け起つ様子や、若苗が白い布製の守り人形（這子）に似るからなど、その呼び名には諸説があります。



▲ハハコグサの花

花期は4～6月で、花の黄色は色あせず、ドライフラワーに最適です。20年以上も前の押花が今も綺麗です。

根元で枝を分け、数本の茎を立てます。高さは15～30cm。綿毛が生えビロード状の白っぽい葉が互生します。この葉を餅に入れたのは綿毛を繋ぎにしたからです。

日本全土、また、中国や東南アジアなどに広く分布する越年草です。農耕とともに有史以前に中国から帰化したとも言われ、人里近くの田畑の周りに多く見られます。

## ○フユイチゴ（冬莓）

冬の山歩きをより楽しくしてくれるのが、この『フユイチゴ（冬莓）』です。晩秋から冬にかけて熟し、「寒莓（かんいちご）」とも呼ばれます。

ほどよい甘さで爽やかな山の味です。よく熟れている実は、摘むとぽろっと取れます。真っ赤に熟したつぶが10個ほど集まっています。一粒が一つの実で、中に種が入っています。



▲フユイチゴの実

南方系の木莓の仲間で、本州の関東以西、四国、九州に分布しています。

常緑の小低木で、つるを伸ばして這い回り地面を覆っています。杉林や竹林、林縁などによく生えています。

葉は互生し、長さ、幅ともに5～10cmほどで、ぎざぎざの先はとげ状で、葉の裏や葉柄は多毛です。

花は夏から秋にかけて、枝先や葉のわきに集まって咲きます。白色で、直径1cmほど、また、花びらは5枚で多数の雌しべ雄しべがあります。がくの外側に短毛が密生しています。

「ミヤマフユイチゴ」は、フユイチゴとよく似ていますが、葉の先がとがり、全体に毛が少なく、がくの外側はほぼ無毛です。つるにはトゲがあります。フユイチゴとの間に雑種ができるため中間的な型が見られます。

昔、莓というと木莓の仲間を指していました。天狗平と石嶽との間に、地元で莓谷と呼ぶ谷があります。フユイチゴやナガバモミジイチゴなど、木莓の多い谷だったのでしょう。

## ○マンリョウ（万両）

艶やかな赤い実が美しく、『マンリョウ（万両）』の名も縁起が良いため、庭木や鉢植え、お正月の飾りなどにします。

19世紀の初め頃から「マンリョウ」と呼ばれ、江戸後期の文政から「万両」の字が定着し始めたと言われます。

常緑で高さは普通1m以下ですが、庭では30年伸び続け、2.1mを記録しました。

葉は互生し、縁は波状の鈍鋸歯です。鋸歯の間のへこんだ所にぷつと膨らみがあり、葉瘤菌（ようれんきん）が共生しています。空気中の窒素を固定して植物に与え、植物から水分や養分を得ています。葉瘤菌は主に熱帯の植物に見られ、日本では稀です。同じ仲間のカラタチバナにも見られます。

7月頃、直径8mmほどの白い花が、前年出た枝の先に集まって咲きます。

実は垂れ下がり直径6～8mmで、晩秋赤く熟します。鳥の好物ですが、地面近くになっているものは、食べられない場合、次の冬まで残っています。実生でよく発芽します。

江戸時代に多くの園芸種が作られ、葉の斑入りや白い実のものなどがあります。

関東以西の暖地に分布。町内の山でも見かけますが、真の自生でなく栽培品の逸出ではないかと思えます。

上蒲刈島の七国見山で、枝が長く葉も大きくて鋸歯が目立たない型を見ました。「高知県植物誌」記載の「オオバマンリョウ」で、これが本来の自生かと思われます。



▲マンリョウの実

## ○ミヤコイバラ（都茨）

木々が葉を落とし冬が訪れた野山で、ひときわ目を引くのが『ミヤコイバラ』などのノイバラ類の赤い果実です。

しかし、植物学的に厳密にいうと、これは果実ではありません。果実とは、雌しべの下部の子房という部分が成熟したものを指します。子房にがくなど子房以外の部分加わって大きくなり果実のように見えるものは「偽果」または「仮果」と呼ばれます。リンゴ、ビワ、イチジク、ザクロなども偽果になります。

バラ科バラ属の偽果は、がくの下半部のがく筒が肥大し、種子のように見える小さな果実を包んでいて「バラ状果」と呼ばれます。

「バラ」の名は、「万葉集」の「荊（うまら）」から転訛したとされていますが、「荊」はイノバラだと言われます。



▲ミヤコイバラの実

『ミヤコイバラ（都茨）』は、ややつる性の落葉低木で茎に鉤形の刺があります。葉は互生し、長さ5～12cmの奇数羽状複葉です。小葉は5～9枚あり、両面とも無毛です。

花は5～6月、白い花が枝先に多数集まって咲きます。花びらは5枚で先はへこみ、直径は2cmほどです。多数の雄しべがあり、雄しべの先の葯（やく）は黄色です。

バラ状果は、直径6～7mmの卵球形で赤く熟します。

ノイバラ類のうち町内でよく見られるのは、「ノイバラ」と「ミヤコイバラ」です。

## ○ヤブムラサキ（藪紫）

「ムラサキシキブ（紫式部）」の仲間、『ヤブムラサキ（藪紫）』の実です。  
10～11月に紫色に熟し、落葉後も残ります。ムラサキシキブに比べると、実の数は少ないけれど大きめで直径4～5mmと、深く4裂したがくが残っています。

10倍のルーペでのぞいてみました。  
がくの外面に分岐した灰白色の毛が密生している様子は、葉を落とした冬の林に見えました。実の表面は微細な網目模様で、新たな美を発見しました。



▲ヤブムラサキの実

花は6月頃。葉腋から柄を出し群がってつきます。紅紫色の筒状で、先は4裂し裂片が開きます。外面は白い軟毛が密に生えます。同じ場所では、ムラサキシキブより少し早く咲きます。

葉は対生し、長さ5～13cmで、基部はやや円形で、先はしだいに細くなります。鋸歯は目立ちません。分岐した軟毛などを密生し、ビロード状の手触りが特徴です。晩秋、黄葉します。

冬芽は鱗片のない裸芽で、分岐した毛が密生する若い葉が向かい合っています。

宮城県以南の本州、四国、九州に分布し、高さ1.5～3mにもなり、やや湿った半日陰を好みます。町内では、比較的よく見かけます。

金の鉱床が確認されている場所の植物を分析したところ、特にヤブムラサキの葉に金の含有量が多いことがわかり、金鉱脈の探査植物として期待されています。

## ○ヤマウルシ

樹皮は、灰白色で縦に褐色の筋が入ります。あまり枝を分けず細かい枝がないことなど樹形も観察すれば、葉のない冬でも『ヤマウルシ』が分かります。

高さは3～8mで、直径は普通5～10cmですが、町内の土岐城山で最大級の18.6cmを計測しています。

大きな奇数羽状複葉で、葉軸が赤みを帯びます。枝先に輪生状に互生し、傘状の姿になります。小葉はハゼノキなどに比べ丸みがあり、成木では普通鋸歯がありません。紅葉が見事です。

雌雄異株で、5～6月、黄緑色の小さな花が密集した花序が葉腋から下がります。

果実は核果で偏球形、直径5～6mmほどで、外果皮に黄褐色の剛毛が密生しているので、無毛のウルシやハゼノキなどと区別できます。外果皮ははがれやすく、白い口ウ質の中果皮が現われます。

熊野町では「カブレノキ」と呼ばれ、その名のとおり樹液に触れるとかぶれますが、近寄っただけでかぶれる人もあり、特に若葉の頃は注意が必要です。

北海道から九州に分布し、町内の山でよく見かけます。

ウルシの語源は「うるしる（潤液）」「ぬるしる（塗液）」で、転訛してウルシになったと言われます。漆は中国・ヒマラヤ原産で、漆を採るため植栽され野生化したものもありますが、町内では見えていません。



▲ヤマウルシの葉

## ○ヤマハゼ

町内に自生するウルシの仲間は、「ハゼノキ」、「ヤマハゼ」、「ヌルデ」、「ヤマウルシ」です。

写真には花も実もなく葉さえありません。でも、冬芽や葉が落ちたあとの葉痕などを観察すれば名前を知ることができます。

この冬芽には、サクラなどの冬芽に見られる鱗片がありません。黄褐色の毛がびっしりと生えています。ハゼノキの冬芽は、3～5枚の鱗片があり無毛なので、ハゼノキではありません。

冬芽の下に三角形の葉痕があります。ヌルデの葉痕は冬芽を囲み、U～V字形なのでヌルデでもありません。

ヤマウルシの冬芽は、短かめで先が丸くきれいに整っていますが、ヤマハゼの冬芽は、やや長めで先が少し乱れています。それで、ヤマハゼだとわかります。

関東以西に分布する落葉小高木です。葉は奇数羽状複葉で互生します。雌雄異株で、5～6月に葉の腋から黄緑色の小さな花が多数集まって咲きます。実は扁球形でなめらかです。秋に黄褐色に熟します。

ハゼノキの実からロウソクのロウをとります。ハゼノキが栽培されるまではヤマハゼの実が利用されていました。別名の「ハニシ」は、ロウをとる「埴締（はなし）」の略と言われます。

心材は黄色で、天皇の御衣を染めるのに使われ「黄櫨染（ころうぜん）」と呼ばれていました。



▲ヤマハゼの冬芽

## ○ウスタビガ

冬、落葉した山で美しい緑色の繭（まゆ）を見かけることがあります。

夏や秋には、木々の葉の中で保護色となって見えにくいのでしょうか。穀類や塩などを入れた吠（かます）のような変わった形なので、すぐにウスタビガの繭と分かります。

冬は抜け殻になっています。枝先にぶら下がっているので、「吊り吠」、「山吠」などと言います。上部には羽化するための出口が、下部には入った雨水を出す小さな穴が開いています。

成虫は年1回、10～11月に羽化します。翅を開くと8～10cmくらいあります。

オスは黄褐色か橙褐色、メスは黄色で、ともに褐色の模様があります。4枚の翅に一つずつ半透明の大きな円い紋があるのが特徴です。オスの前翅の先は外側に突き出ているので、メスより細長い形です。メスは交尾の後、繭や近くの木の枝に産卵します。

卵の状態越冬し、春に孵化（ふか）した幼虫は、クリやコナラ、ハンノキなどいろいろな木の葉を食べて成長します。ずんぐりして毛はなく、背面は黄緑色、腹面は暗緑色です。胸部の背に一对の短い突起があります。幼虫に触ると、頭を持ち上げキーキーと音を出すそうです。6～7月に繭を作り、中で蛹（さなぎ）になります。

本州、四国、九州の平地から山地に広く分布していて、町内でもよく見られます。



▲ウスタビガの蛹

## ○フクラスズメ（脹雀蛾）

前翅は地味ですが、後翅には美しい青色の帯があります。普通に止まっている時は、後翅は見えません。危険が迫った時、後翅を見せて敵を驚かせ、その隙に逃げようとします。

成虫は年に2回、7～8月と10～11月に発生します。秋に発生した成虫は越冬するので、春にも見られます。普通種で、翅を開いた長さは75～85mmほどにもなります。



▲上から見たフクラスズメ

幼虫は黄色に黒い縞模様があり気門の周りが赤い紋となって並んだどぎつい色彩で、白い長毛があります。

幼虫の多くは、体の色を周囲の色に似せ、目立たなくして敵から身を守ります。目立つ幼虫は、毒を持っていたり、食べても味が悪かったりするものが多く、食べた鳥などが二度と狙わないように、わざと目立たせて身を守っています。

幼虫は、カラムシ、コアカソ、ヤブマオなどイラクサ科の草を食べます。触ると上体をそらし、左右に激しく振って威嚇します。

ほぼ日本全土に見られ、朝鮮や中国、東南アジアなどにも広く分布しています。

『フクラスズメ（脹雀蛾）』は、スズメガ科ではなくヤガ科の仲間です。

ヤガ科は大部分が夜行性なので、夜蛾（ヤガ）の名があります。「安芸熊野の自然誌」によると、町内で61種記録があります。「フクラスズメ」や「オオトモエ」、「フタトガリコヤガ」など数種類を追加します。

## ○ウグイス（鶯）

「春告鳥」の異名もあり、詩歌、絵画にも多く登場し、最も親しまれている『ウグイス（鶯）』は、町の鳥に指定されています。

3月に入ると、「ホーホケ」とたどたどしく鳴き始めます。

「法、法華経」の聞きなしもある、「ホーホケキョ」の声は、オスが繁殖期に仲間のウグイスに対して自分の縄張りを宣言する“さえずり”です。

突然けたたましく、「ケキケキョケキョ…」と鳴き続ける“谷渡り”と呼ばれる声は、警戒の時に出します。

繁殖期以外は一羽で生活し、「チャッチャツ」という“笹鳴き”をします。

冬には庭の生垣などにも来ます。

体は、いわゆる鶯色よりも、地味な褐色で胸から腹は淡色です。大きさはスズメほどで、尾はやや長めです。

冬に、古い巣を見つけることがあります。地上1mくらいで、笹や低木の三叉になった所に、笹やススキの葉を巻いた丸い巣です。

笹のある所で繁殖します。産卵は5～6月で、卵は4～6個ほど産み、抱卵日数は14～16日と、巣立ちまで14日ほどです。巣作りからのすべてをメスが行い、せっせと雛にクモや昆虫を運びます。一部のウグイスは一夫多妻で繁殖します。

巣には、しばしばホトトギスが卵を産み、ウグイスに育てさせます。卵は、両種とも赤褐色で似ています。

日本全土に分布し、町内では留鳥で、多く生息します。



▲ウグイスの巣

【写真・文】 富沢由美子

